

Ⅲ—1 国語科

特定の課題に対する調査 教科等別結果の分析と考察

1 【系統性】の理解に基づく【連続性】を確保した調査企画の全体像

校種	小学校		
学年	第3学年	第4学年	第5学年
出題範囲	小学校第1・2学年	小学校第3・4学年	

A 話す・聞くこと	エ	大事なことを落とさない	エ	中心に気を付けて聞き、質問・感想
		・B【話聞】1-1 ・B【話聞】1-2		・B【話聞】1-1 ・B【話聞】1-2

B 書くこと	イ	構成：事柄の順序	イ	構成：段落の役割
		・B【書】5-1		・B【書】5-1
	エ	推敲：間違いに気付き直す	オ	推敲：間違いを正し、よりよい表現に
		・A【書】5-2		・A【書】5-2
オ	交流：よいところ見付け感想	カ	交流：考えの明確さについて意見	
	・S【書】5-3		・S【書】5-3	

C 読むこと	イ	時間・事柄の順序	イ	内容の中心となる語・文
		・C【読】(説)3-1		・C【読】(説)3-1
	イ	内容の大体	イ	段落相互の関係
		・B【読】(説)3-2		・B【読】(説)3-3 事実と意見の関係、 ・B【読】(説)3-2
	ウ	人物の行動、想像を広げ	ウ	場面の移り変わり
		・C【読】(文)4-1 ・B【読】(文)4-2		・C【読】(文)4-1 登場人物の性格を想像 ・B【読】(文)4-2 登場人物の気持ちの変化を想像 ・A【読】(文)4-3
		大きな言葉・文を書抜		要点・細かい点・引用・要約：人物や情景の描写
	エ	・A【読】(説)3-3 ・A【読】(文)4-3	エ	・A【読】(説)3-4 ・A【読】(文)4-4
経験と結び付いた思いや考え		自分の考えをもつ		
オ	・S【読】(説)3-4 ・S【読】(文)4-4	オ	・S【読】(説)3-5 ・S【読】(文)4-5	

伝統的な言語文化と 国語の特質に関する事項	イ	(ウ)意味によるまとまり	イ	(ウ)性質・役割による類別
		・C【言】2-1		・C【言】2-1
		(カ)主語・述語の関係の理解		(キ)修飾語・被修飾語の関係
		・C【言】2-2		・C【言】2-2
		(オ)文の意味に沿う句読点		(ク)辞書の利用
		・C【言】2-3		・C【言】2-3

※S～C：設問レベル、【話聞】話す・聞く能力 【書】書く能力、【読】読む能力
【言】言語についての知識・理解・技能、番号：設問番号、(説)説明的文章、(文)文学的文章

小学校		中学校	
第6学年	第1学年	第2学年	第3学年
小学校第5・6学年		中学校第1学年	中学校第2学年

エ	話し手の意図を捉え、自分の意見と比較	エ	質問、共通点・相違点の整理	エ	論理構成・自分と比較
	・B【話聞】1-1 ・A【話聞】1-2		・B【話聞】1-1 ・A【話聞】1-2		・B【話聞】1-1 ・A【話聞】1-2

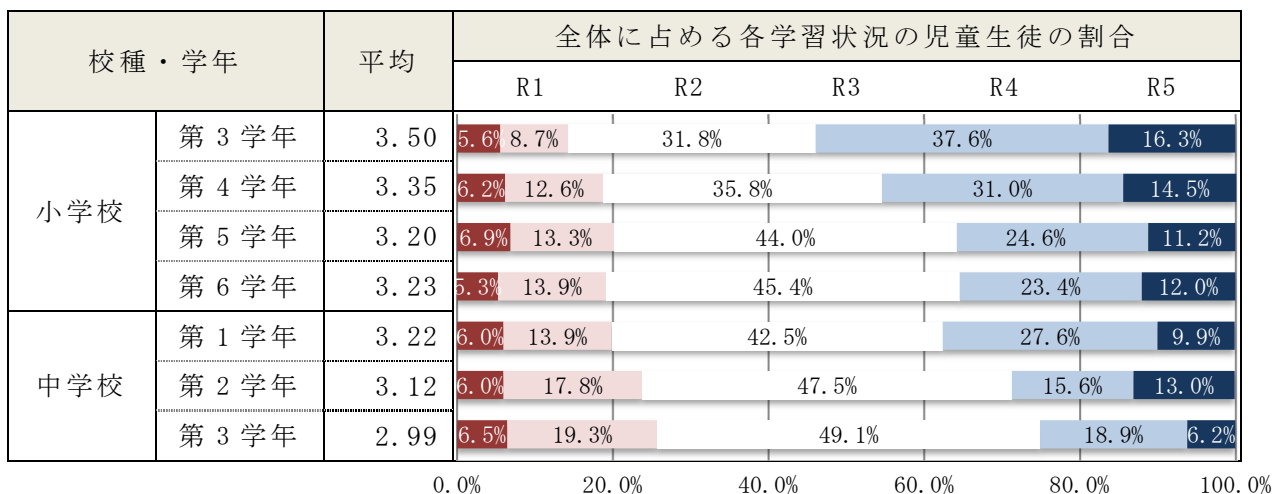
イ	構成：考えを明確にする文章全体の構成	イ	構成：段落の役割	イ	構成：立場、事実や事柄明確に
	・B【書】5-1		・B【書】5-1		・B【書】5-1
オ	推敲：表現の効果	エ	推敲：表記や語句の用法、叙述	エ	推敲：語句、文、段落相互の関係
	・A【書】5-2		・A【書】5-2		・A【書】5-2
カ	交流：表現の仕方に着目して助言	オ	交流：題材、材料、根拠の意見	オ	交流：意見、助言、考えを広げる
	・S【書】5-3		・S【書】5-3		・S【書】5-3

ウ	内容を的確に押さえ要旨を捉える	イ	文脈上の語句の意味	ア	抽象的な概念・心情を表す語句	
	・C【読】(説)3-1		・C【読】(説)3-1		・C【読】(説)3-1	
	・B【読】(説)3-3		中心・付加的な部分の読み分け要約		イ	文章全体と部分の関係
	事実と意見、感想の関係		・B【読】(説)3-2			・B【読】(説)3-2
・B【読】(説)3-2	要旨を捉える	ウ	人物の言動の意味			
考えを明確にする	・B【読】(説)3-3		・C【読】(文)4-1	・B【読】(文)4-2		
・S【読】(説)3-5 3-4 中1	場面の展開、人物の描写	エ	人物の相互関係、心情を捉える	ウ	例示や描写の効果	
・C【読】(文)4-1	・C【読】(文)4-1		・C【読】(文)4-1		・B【読】(説)3-3	
・B【読】(文)4-2	文章構成・展開、表現の特徴	エ	・B【読】(文)4-3	ウ	構成や展開、表現の仕方について根拠を明確に	
・B【読】(文)4-3	・S【読】(説)3-4		・S【読】(説)3-4		・S【読】(文)4-3	
優れた叙述について考えをまとめる	・S【読】(文)4-3	オ	文章構成・展開、表現の特徴	エ	構成や展開、表現の仕方について根拠を明確に	
・S【読】(文)4-5 4-4 (中1)	・S【読】(説)3-4		・S【読】(説)3-4		・S【読】(文)4-3	
考えを広げ、深める	もの見方・考え方を広げる	オ	・A【読】(説)3-4	エ	見方・考え方の知識・体験関連付け	
・A【読】(説)3-4	・A【読】(説)3-5		・A【読】(説)3-5		・A【読】(文)4-4	
・A【読】(文)4-4 4-5 (中1)	・A【読】(文)4-4					

イ	(ア)音声の響き・仕組み	イ	(ア)音声の響き・仕組み	イ	(イ)同音異義語、多義的意味
	・C【言】2-1		・C【言】2-1		・C【言】2-1
	(キ)文や文章の構成		(イ)単語の活用		・C【言】2-2
・C【言】2-2	(エ)単語の類別	ウ	(エ)単語の類別		
(ク)敬語の使い方	・C【言】2-2				
・C【言】2-3					
(イ)漢字の由来、特質					
・C【言】2-1					

2 結果の分析と考察

(1) 5段階の学習状況の評定(学力段階)(再掲)



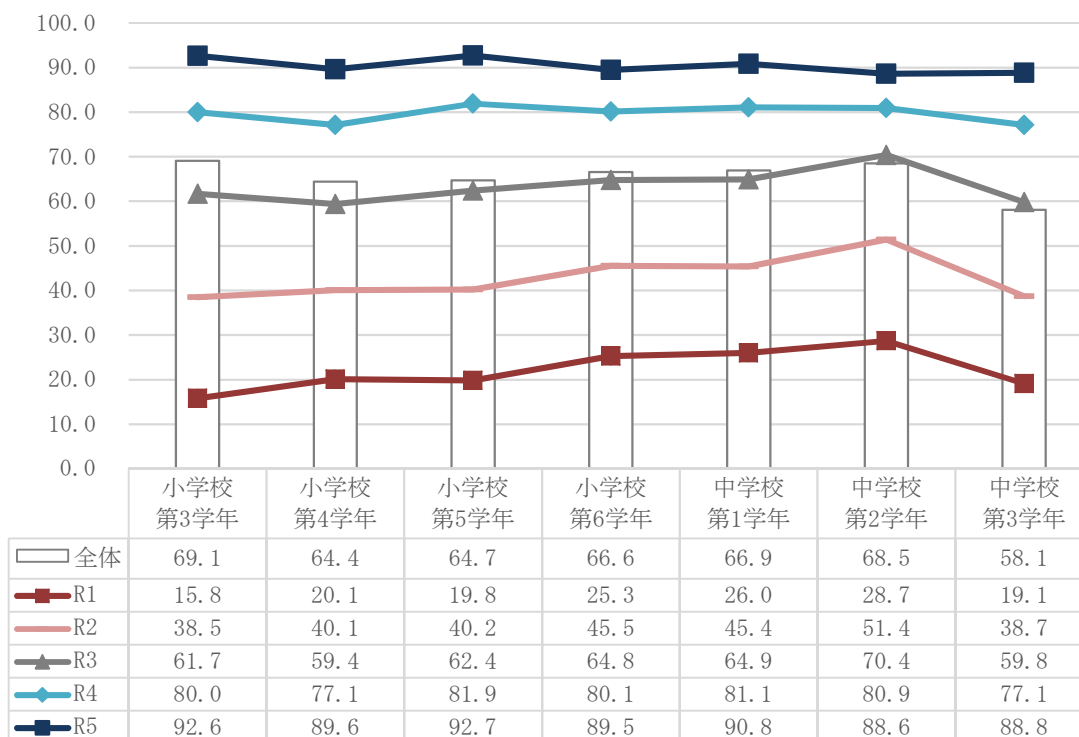
※学習指導要領に準拠した調査実施の前学年の学習状況の評定(学力段階)

R5 発展的な力が身に付いている R4 十分な定着がみられる

R3 おおむね定着がみられる(最低限の到達目標)

R2 特定の内容でつまずきがある R1 学び残しが多い

(2) 学習状況の評定(学力段階)ごとの平均正答率(教科全体)(再掲)



〔学力段階に関する考察〕

- 「杉並区教育ビジョン 2012 推進計画」の目標 I に準拠すると、中学校第 3 学年における R3 以上の割合はおよそ 74% であり、令和 3 年度の目標値 80% からは 6 ポイント低い状況である。しかし、平成 27 年度は 54%、28 年度は 63%、29 年度は 65%、30 年度は 69% と着実に目標に近付いてきている。
- 学年別に見ると、学年進行に伴って R1・2 の全体に占める割合が増加している。つまり、学び残しがあるままに学年が進み、中学校第 3 学年では 26% の生徒が何らかのつまずき、学び残しを抱えている状態である。一方、R4・5 は、学年進行にしたがって割合が減少している。当該学年で期待される目標に対して十分満足できる水準にあった児童・生徒が減少していく傾向である。
- ◎（概括 1）学びの構造転換を図る目的の一つは、全ての学力段階の児童・生徒に応じた学習の展開を実現することである。教師自らが学びを創るのではなく、学習者主体の学習の場を提供し、学習課題や学習方法の自己選択の機会を最大化することで、全ての児童・生徒に応じた学習が可能になるからである。いつでも同じことを同じ場所で同じペースで学習するという展開から脱却することで、学び残しのある児童・生徒がいつでも学びたいときに学ぶことができ、学び残したことをいつでも取り返す学びの場を提供することができる。特に個別に探究に浸る時間では、それぞれの児童・生徒が自分の探究したい課題を自分なりの方法で追究することで、どの児童・生徒も充実し、満足した学習を行うことができるはずである。
- ◎（概括 2）R1・2 の増加と R4・5 の減少に特徴付けられる学習状況の改善を図る有効な手だては、児童・生徒の交流を活性化させ、学び合いを生かした協同の学びを積極的に取り入れることである。探究途中で確認し合ったり、友達の意見や感想を聞いたり、探究した結果を伝え合ったりと、一人では解決できない課題も、対話を積み重ねることによって最適解にたどり着くことができる。

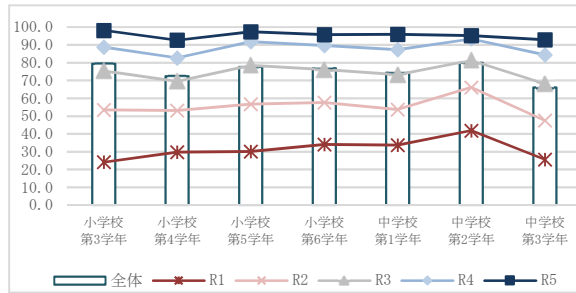
〔教科全体の学力段階ごとの平均正答率に関する考察〕

- R4・5 の正答率は、各学年平均して 80~90% である。R4 と 3 の差を比較すると、中学校第 2 学年に向かって差が小さくなる傾向がみられる。他方、R3 と 2、R2 と 1 の差は学年進行に伴う変化がほとんどみられず、一定である。このことから、R1 と 2 の段階にある児童・生徒は、小学校第 1・2 学年の時点でも同様の学習状況であることが推察できる。個々の言語体験や語彙量の差異に対応するためにも、教科書例題を一律に与え、皆同じペースと方法で課題解決を目指す展開からの脱却が必要である。
- ◎（概括）個別に選ぶ機会を増やすことでもっと学びたくなり、自分で課題を立てたからこそもっと探究したくなる。当該学年の基礎的・基本的な事項は、自分の課題を解決する過程を通じてこそ確実に身に付く。さらに、協同することで「違うことは面白い」という実感を育て、中学校第 3 学年になっても探究意欲を失わずに主体的に学ぶ態度を育む必要がある。予測困難なこれからの社会を生きていく児童・生徒にとって、これがすなわち自ら課題を見付け、解決していく力を育成していくこととなる。

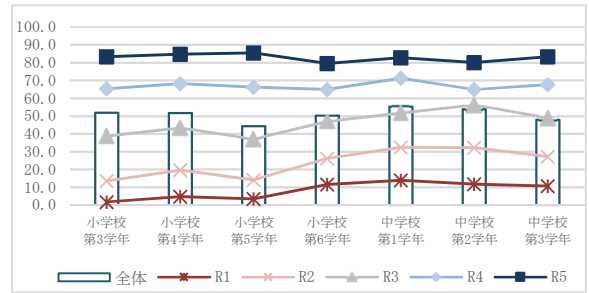
(3) 基礎・活用別、観点別、領域別の学力段階ごとの平均正答率

ア 基礎・活用別

① 基礎

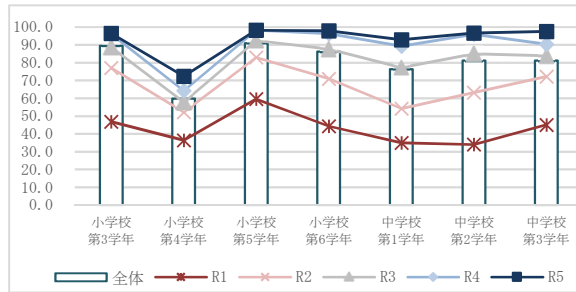


② 活用

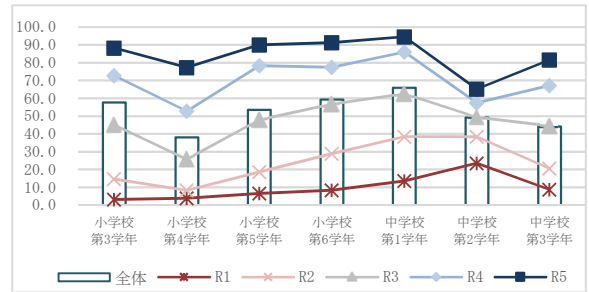


イ 観点別

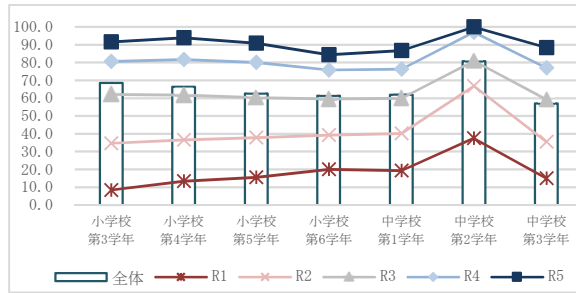
① 話す・聞く能力



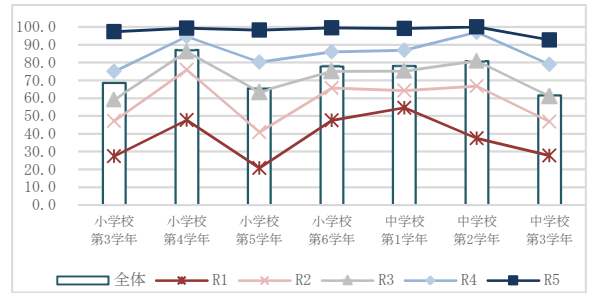
② 書く能力



③ 読む能力

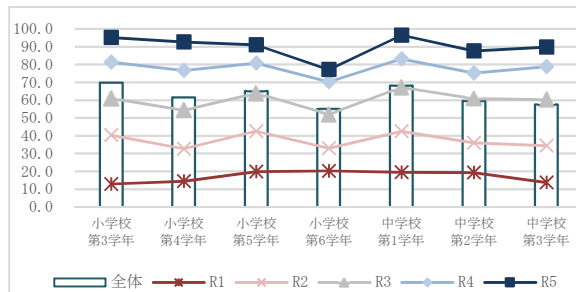


④ 言語についての知識・理解・技能

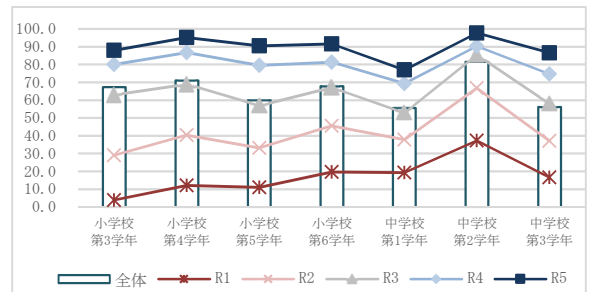


ウ 領域別

① 説明的な文章



② 文学的な文章



〔基礎・活用別の学力段階ごとの平均正答率に関する考察〕

- 「基礎」においては、R1 の正答率は 30～40%、R2 は 50～60%、R3 は 70～80%、R4 が 80～90%、R5 は 90%～100%とほぼどの学年も同じであり、各学年の調査内容の精度は安定している。ただし、小学校第 3 学年から中学校第 2 学年の平均正答率が 70%から 80%のレンジにあるのに対し、中学校第 3 学年の平均正答率のみ約 10 ポイント低い 65.5%であった。
- 「活用」については、基礎と比べて R1 と 5 の正答率の差が大きい。小学校第 5 学年から中学校第 1 学年では R3 と 2 の差が縮まるものの、第 2 学年で再び差が開き、R2 と 1 の差については小学校第 5 学年以降において学年進行に伴う拡大がみられる。

〔観点別の学力段階ごとの平均正答率に関する考察〕

- 「話す・聞く能力」については、全学年を平均した正答率が 80.8%と全観点の中で最も正答率が高い。背景に R1 の正答率が 43.0%と高いことが挙げられる。R1 が力を発揮しやすい能力といえる。小学校第 4 学年の平均正答率が低いのは「話の内容を聞いて質問する」設問の正答率が 23.0%と、「話す・聞く」全体の正答率 80.8%と比べ 57.8 ポイント低いことが影響している。
- 「書く能力」に関する課題は依然大きく、全学年で平均した正答率が 52.5%と全ての観点中で最も低い。中でも小学校第 4 学年の平均正答率は 38.0%、中学校第 2・3 学年はそれぞれ 49.2%・44.1%と他学年と比べて低くなっている。他の観点と比較した際に着目すべきは、R4 と 3 の差が大きい傾向である。ただし、中学校第 2 学年と 3 学年を比較すると、全体の平均正答率の差こそ約 5 ポイントであるものの、中学校第 3 学年では R2 と 3、R3 と 4、R4 と 5 の差が大きくなっている。
- 「読む能力」の全学年を平均した正答率は 63.9%である。R1 と 5 の差が 74.8 ポイントと他の観点の段階差と比べて最も大きい。
- 「言語についての知識・理解・技能」については、平均正答率は 74.2%である。設問レベルは全て基礎 C であることから、通過率 100%を目標とする基準に照らすと、大きな課題を残している。

〔領域別の学力段階ごとの平均正答率に関する考察〕

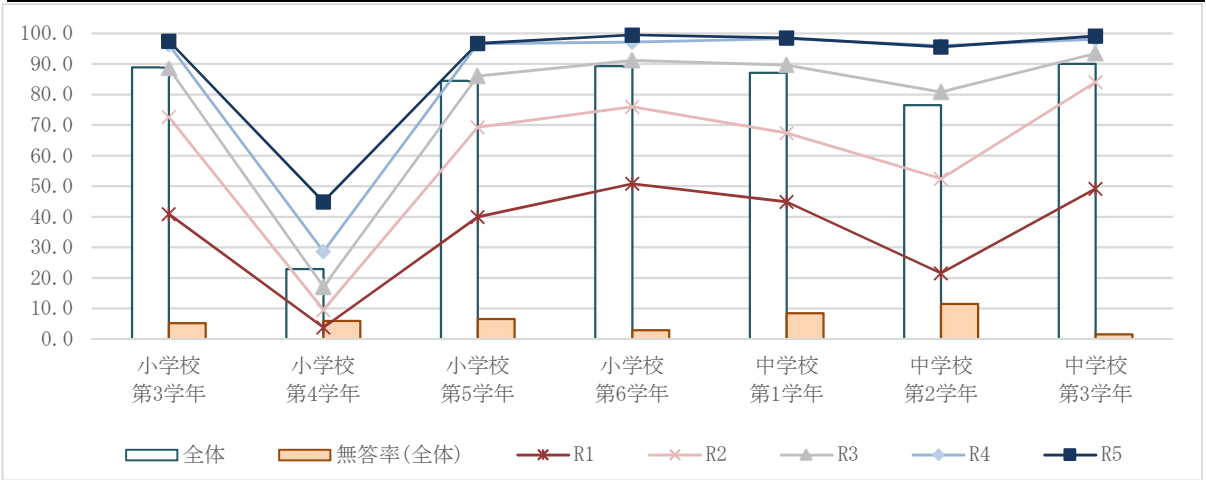
- 「文学的文章」の正答率が 65.7%、「説明的文章」の正答率が 62.4%とほぼ同程度の正答率となっている。
- ◎（概括）これからの学びは、あくまでも学習者主体を基本とする。児童・生徒が自ら課題や方法を選び、選ぶからこそ探究に浸り、浸る先に生まれる新たな課題を共に解決したくなるという内発的な協同に転換していく必要がある。自らの問いを基に課題をもち、それぞれが最適な言語活動を選択し、共に考え課題解決に挑む。協同して最適解を求め、対話によって深い学びを追究するという経験は、話す・聞く、書く、読むの全ての領域の言語能力を伸ばし、かつ、それらが統合的に働くようにすることはもちろん、全ての児童・生徒が活躍する手だてとなる。

(4) 領域別に抽出した設問の(準)通過率・無答率

ア 聞く・話すこと(聞くことの系統)

① 「聞くこと」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

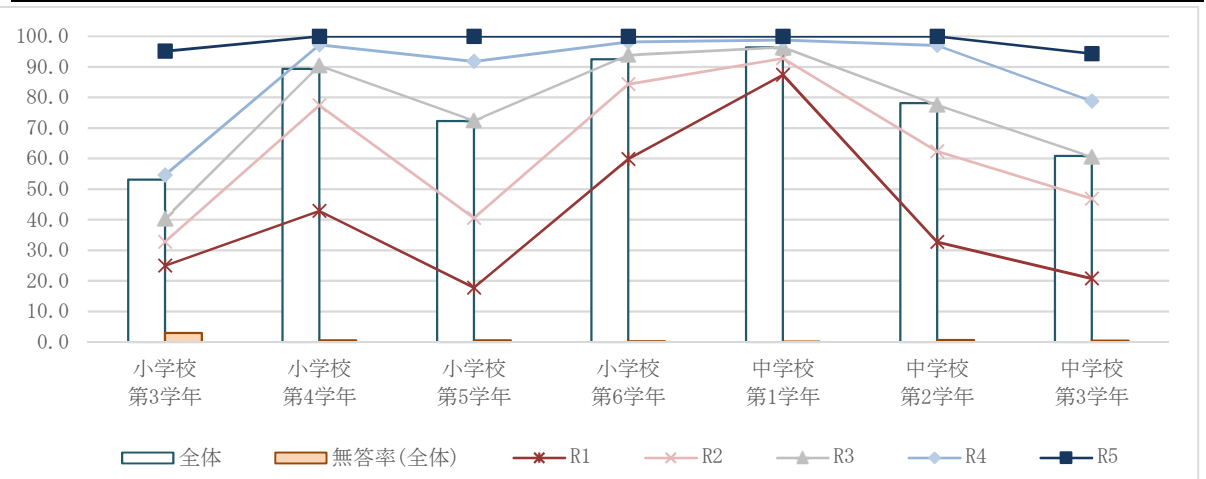
校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 B	1-2	エ 話し手が知らせたいことを聞き取る。
	第4学年	基礎 B	1-2	エ 話の内容を聞いて質問する。
	第5学年			
	第6学年	活用 A	1-2	エ 話し手の意見と比べて自分の考えを書く。
中学校	第1学年	活用 A	1-2	エ 話し手の意見を踏まえて自分の考えを書く。
	第2学年	活用 A	1-2	エ 話し手の考えと比較し、立場と理由を明確に書く。
	第3学年	活用 A	1-2	エ 話し手の考えと比較し、立場と理由を明確に書く。



イ 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(言葉の特徴や決まり)

② 「語句・言葉」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 C	2-3	カ 文章の主語・述語の関係を押さえる。
	第4学年	基礎 C	2-2	キ 修飾語・被修飾語の関係を理解する。
	第5学年			
	第6学年	基礎 C	2-2	キ 重文を単文に分ける。 キ 複文を単文に分ける。
中学校	第1学年	基礎 C	2-2	エ 自立語と付属語を分類する。
	第2学年	基礎 C	2-2	エ 自立語と付属語を分類する。
	第3学年	基礎 C	2-2	エ 自立語と付属語を理解して単語を分類する。



〔「聞くこと」に関する設問の考察〕

小問（1）は話の内容を聞き取る設問である。小学校第3学年から第5学年では学年が上がるにつれて通過率が高くなり、90%後半台にまでなる。その理由は、何について話をしているのかという話題や要点を聞き取る指導が教科を超えて日常的・恒常的に行われており、話す側も初めに話題や考え・結論を述べ、次に内容を具体的に話すというように、聞く相手によく伝わる話し方を工夫しているためと考えられる。

小問（2）は小学校第5学年までが聞いたり質問したりする設問で基礎B、小学校第6学年以上は話者の考えについて自分の考えを書く設問で活用Aである。小学校第4学年の通過率が他学年に比べて低い理由として、話の内容を理解することにとどまり、話者への関心や話題への興味を抱いて聞くという意識にまで高まっていないと言える。形式的な型に当てはめて質問するのではなく、「更に詳しく聞いてみたい、分からないことを聞きたい」というように、積極的な聞き手として高める必要がある。

小学校第6学年以上の「話し手の考えに関わって自分の考えを書く」設問については、中学校第2学年が70%台であるものの、他学年は90%に近い。話し手の話を自らの関心事として聞き、積極的な聞き手として自分の考えをもつことが対話を生む土壌となる。相手の話に傾聴して理解し、話したいことを更に引き出し、共感しながら互いに考えを出し合い、対話へと結び付け、だれもが納得する第三の考え、納得解や最適解を導く、深い学びへと高まっていくことが望ましい。

〔「語句・言葉」に関する設問の考察〕

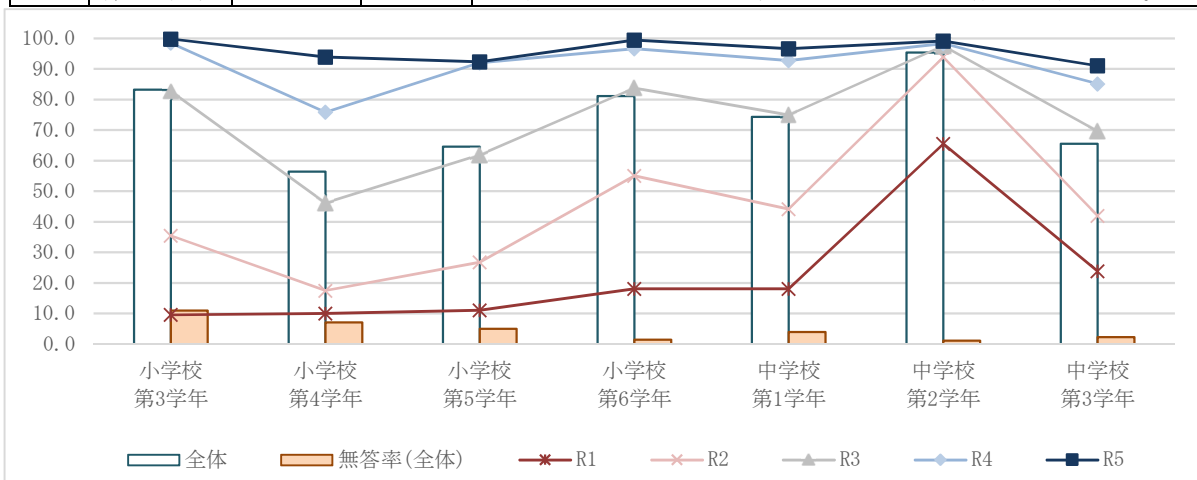
小学校第3学年の「文の意味になるように読点を打つ」設問の通過率が53.1%となり、前年度までの通過率が例年20%前後であったことから比べると大きな進展があった。今年度は、読点の位置によって意味が変わることがより分かるように挿絵を添えたために、より多くの児童が意味を理解できたと考えられる。読点の有無、読点の位置による意味の違い等の理解は、日常生活において具体的な場面で事例を挙げたり文例を示したりして、その意味の違いを児童自らが感じ取って納得できるような工夫が必要となる。格助詞「は」「が」の後に読点を付けるというように、形式的な指導は避けるようにしたい。

語句・言葉の習得は基礎・基本であるために、例えば「語彙を増やせばよい」「意味の理解より、とにかく覚えることが先だ」というように、機械的な指導を行ったり反復学習に陥りがちになったりする。言葉の習得や文法の理解は、先に基礎・基本があって、次に活用があるのではない。学習者が目の前に解決する対象があってこそ基礎・基本が必要となる。それを学ぶ必然性や意欲、興味、関心が学習者にあつてこそ必要と感じ、身に付くのである。国語で理解したり表現したりする様々な場面の中で生きて働く知識・技能として身に付けるために、思考・判断し表現することを通じて育成を図ることが求められる。知識及び技能と思考力・判断力・表現力等は絶えず往還的に働くことによって向上すると言える。

ウ 書くこと(構成、推敲の系統)

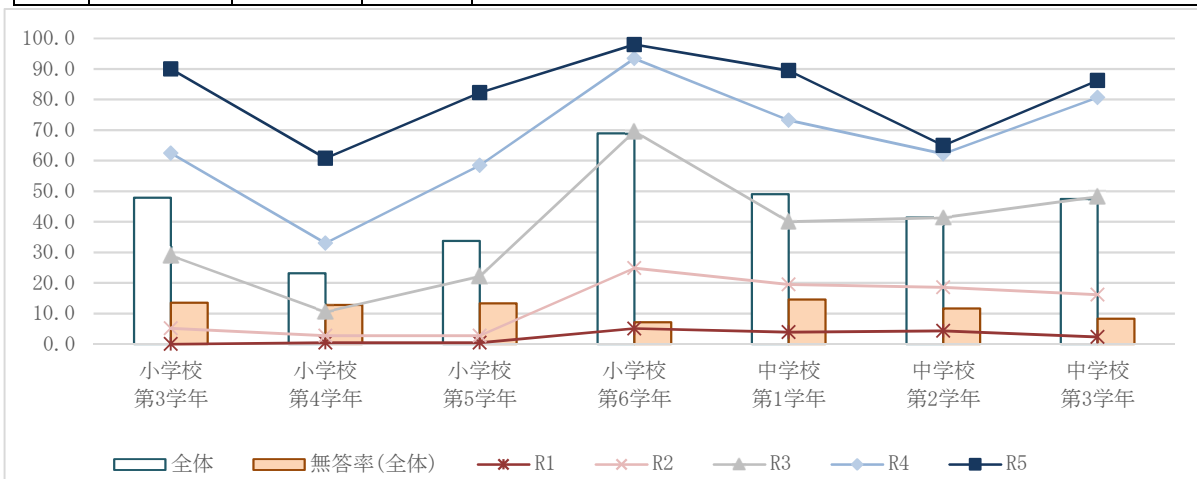
①「構成」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 B	5-1	イ 簡単な構成の理由を考える。
	第4学年	基礎 B	5-1	イ 文章全体における段落の役割を考える。
	第5学年			
中学校	第1学年	基礎 B	5-1	イ 文章の構成を説明する。 イ 文章全体における段落の効果を考える。
	第2学年	基礎 B	5-1	イ 段落の役割が明確になるような接続語を考える。
	第3学年	基礎 B	5-1	イ 伝えたいことが明確になるように構成を工夫する。



②「推敲」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	活用 A	5-2	エ 文末の間違いを書き直す。
	第4学年	活用 A	5-2	エ 文末の間違いを書き直す。
	第5学年			オ 文章をよりよい表現に書き直す。
	第6学年	オ 表現の曖昧さを確かめて書き直す。		
中学校	第1学年	活用 A	5-2	オ 表現の効果を考えてよりよい文に書き直す。
	第2学年	活用 A	5-2	エ 内容を分かりやすくするために適切に書き加える。
	第3学年	活用 A	5-2	エ 段落がもつ役割を考えて適切に書き直す。



〔「構成」に関する設問の考察〕

基礎的・基本的な知識及び技能を趣旨とし、全児童・生徒に確実な習得を目指す基礎 B レベルの内容で、文章全体の構成を考える設問である。通過率が最も低いのは小学校第 4 学年の 56.4%であり、基礎 B の目標値に達していない。理由の一つとして、書き方の形式や型をあらかじめ教師が教え込み、型に当てはめて文章を書くという指導があるのではないかと考えられる。教え込むだけでは理解にまでつながらない。

文章を書くときに、何より大切にしたいことは、「伝えたい」という意思の喚起である。逆に、文章を読むときには「筆者は何を伝えたくてこの文章を書いたのか」を考えることが大切になる。書き手は第一に何を伝えたいか、なぜ伝えたいかを考える。次に、内容や形式をどうするかを考える。相手に内容をよりよく伝えるために、書き方をどのように工夫するとよいかを考えるのである。書き方の工夫の一つとして、構成を位置付ける。構成を考える際には、伝えたい相手は誰か相手意識をもち、相手を具体的に想定した書き方が要求される。あらかじめ構成の仕方を型にはめて教えるのではなく、自分自身が書きたいことを自分で決め、内容にふさわしい構成はどうすればいいかを自ら試行錯誤しながら考えることが望ましい学び方といえる。相手によく伝わるかどうかを考えるためには他者との協同の学びが欠かせない。相手に質問したり感想を述べ合ったりして相手の立場に立ち、他者と共に協同して学び合うことで、相手に伝わるよりよい文章が書けるようになる。

〔「推敲」に関する設問の考察〕

間違いを正したり、よりよい文に書き直したりすることを趣旨とする推敲の設問で活用 A レベルである。7 学年全ての R1 の通過率を見ると、0%かそれに近い。主な理由として、設問の意図が十分に理解できなかったことが大きいと思われる。

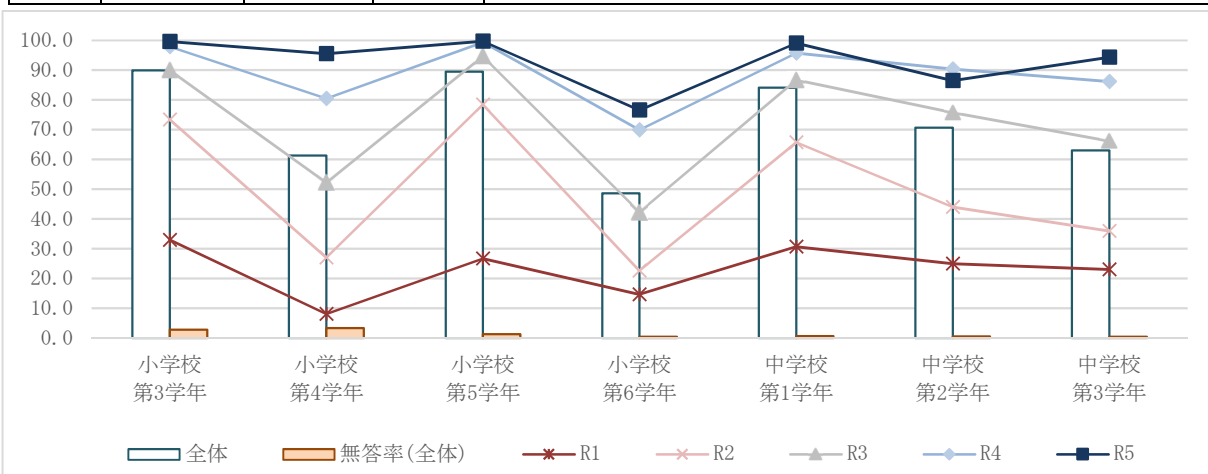
R1 の無答率は、小学校第 3 学年が 75.0%と全学年の中で最も高く、学年が進行するにつれて徐々に下がり、中学校第 3 学年では 43.8%になる。これは昨年度の結果より 20 ポイント下がったことになる。R1 の無答率が下がるということは多くの生徒が設問に取り組むようになったということであり、設問の趣旨が理解できることの表れとも言える。

推敲の学習といえば、誤字脱字の訂正や語と語や文と文との続き方を確かめることに終始しがちになり、形式的になってしまふことが多い。文章を推敲する学習は、表記上の間違いを正すことだけを意味しない。言葉の意味・文法・文脈の意味理解や書かれた背景等、確かで幅広い知識や見識を必要とすることは周知の通りである。系統性を構造的に踏まえたうえで、書く人の意図や思いが相手に正しく伝わるか、例えば文章の構成や書き表し方、言葉の選び方が適切であるか等にまで言及する必要がある。また、推敲はある程度困難な学習である。だからこそ協同の学びの場が必要となる。学習者が自ら「他者の力を借りたい」と感じたときに、必要な他者を求める自己決定できる環境とそれに応えられる人・もの・こと環境づくりが欠かせない。

エ 読むこと「説明的な文章」(文章の解釈の系統)

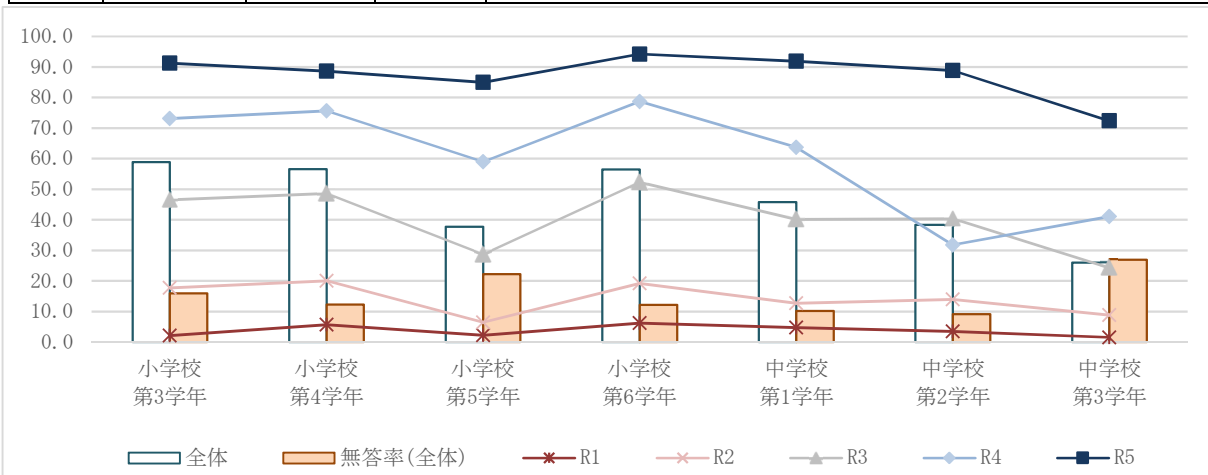
①「文章の解釈」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 B	3-2	イ 大体の内容を捉える。
	第4学年	基礎 B	3-2	イ 事実と意見との関係を考え、事実の文と意見の文を区別する。
	第5学年		3-2	
	第6学年	基礎 B	3-2	ウ 事実と感想、意見などとの関係を押さえ、考えの根拠や理由となる文を選ぶ。
中学校	第1学年	基礎 B	3-2	イ 中心的な部分を捉えて内容を要約する
	第2学年	基礎 B	3-2	イ 各段落が文章全体の中で果たす役割を捉える
	第3学年	基礎 B	3-2	



②「考えの形成」に関する設問の出題趣旨と学力段階別(準)通過率(%)

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	活用 S	3-4	オ 文章の内容と自分の経験とを結び付けて考えを書く。
	第4学年	活用 S	3-5	オ 説明の仕方について考えを書く。
	第5学年		3-5	
	第6学年	活用 S	3-5	オ 説明の仕方や書き方の工夫について考えを書く。
中学校	第1学年	活用 S	3-4	オ 説明の仕方や書き方の工夫について考えを書く。
	第2学年	活用 S	3-4	エ 文章の表現の特徴について考えを書く。
	第3学年	活用 S	3-4	ウ 文章の表現の特徴について根拠を明確にして書く。



〔「文章の解釈」に関する設問の考察〕

全ての児童・生徒に確実な習得を目指す基礎 B レベルであり、小学校第 4 学年と第 6 学年の通過率はそれぞれ 61.3%、48.7%と目標値に達していない。第 4 学年は、文中の指定された文が事実の文か意見の文かを判断する設問である。事実の文末は「～した」、意見の文末は「～してほしい」と明らかに書き方が違っていて、文末の書き方に着目すれば判断できる。日常の学習が書かれている内容の理解に重点を置きすぎ、表現に着目して考えることが少ないのではないかと考えられる。

小学校第 6 学年は、筆者の仮説の根拠となる具体例がどれかを問う設問である。読み手の納得を得るためにどのような事実・具体例から考えを導き出しているかを読まなければならない。通過率が過半数に達していない理由として、帰納的思考法にはある程度慣れてはいても、演繹的思考法の体験が不足しているのではないかと考えられる。日常生活や他教科においても「～を根拠に、～という理由で、～と考える。」という考え・根拠・理由の三角ロジックで論理的に思考し、話したり書いたりする場面において定着を図ることが求められる。また、既有知識を意図的に活用して考える機会が不足していると言える。新学習指導要領では生きる力の具体化として「理解していること・できることをどう使うか」を掲げており、思考力・判断力・表現力等の育成と知識・技能の習得は、絶えず往還的に働かせることが必要である。

〔「考えの形成」に関する設問の考察〕

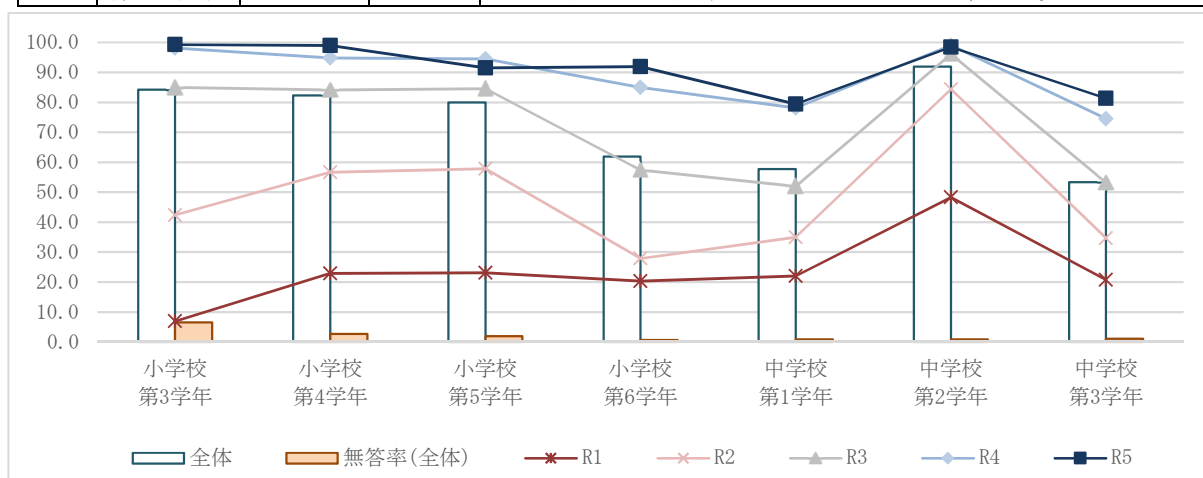
文章の内容ではなく、文章の形式（表現）に関して考えることを出題趣旨とする活用 S の設問である。説明的文章の指導事項を比較すると、内容に関して考えを書く設問では通過率が高く、形式になると低い傾向を示す。中学校第 1 学年では 75.8%と 45.8%で 30 ポイント、第 2 学年では 66.8%と 38.4%で 28 ポイント、第 3 学年では 61.1%と 26.0%で 40 ポイント低くなっている。これだけ大きく差があることの背景にある学習状況に対し、問題意識をもって臨むことが必要である。設問の例を挙げれば、中学校第 1 学年の内容は「筆者の主張についてあなたの考えを書きなさい」、形式は「文章の説明のしかたの工夫と効果について書きなさい」である。説明的文章を読むときは、筆者は何を伝えたくてこの文章を書いたのか（内容）、そのためにどのような書き方を工夫しているのか（形式）の両方から読むことが重要となる。特に、筆者は読み手に説得力を高めるために書き方をどのように工夫しているのか、どのような効果をねらってどんな書き方をしているのかという視点で文章を読む学習経験を積み重ねることが必要である。

大切なことは、文章のどこに、どのようなことに着目して読むかが、読み手である一人一人に任されていることである。各々が興味・関心をもったことについて選び取り、自分で決め、自分なりの方法で読み進め、自分なりの答えを出すことが望まれる。この読みで身に付けた知識や技能は最終的には書くことでより確かなものになる。改めて読むことと書くことの連続性が大切となることは言うまでもない。

オ 読むこと「文学的な文章」（文章の解釈／自分の考えの形成の系統）

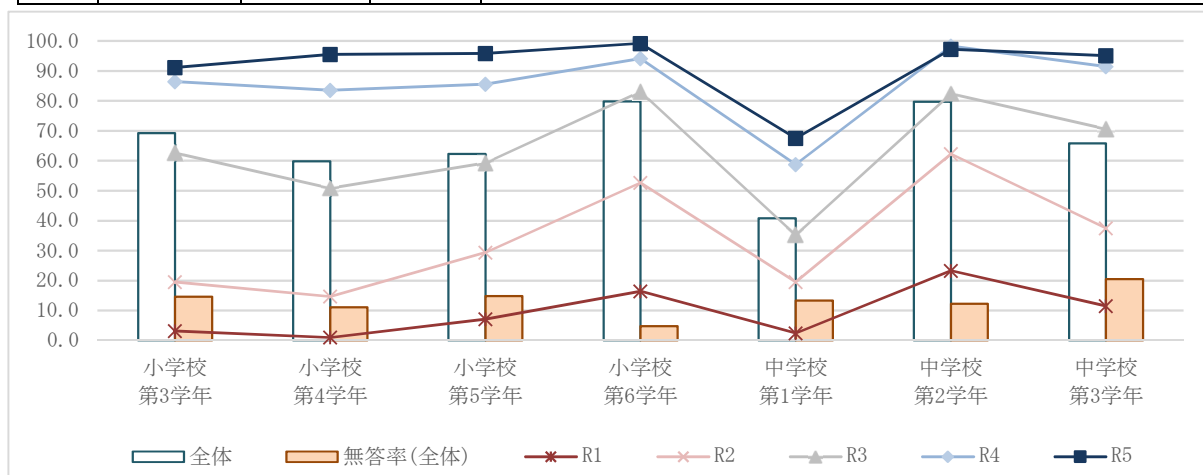
① 「文章の解釈」に関する設問の出題趣旨と学力段階別（準）通過率（％）

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	基礎 B	4-2	ウ 登場人物の行動を想像する。
	第4学年	基礎 B	4-2	ウ 登場人物の性格を想像する。
	第5学年			
	第6学年	基礎 B	4-2	エ 登場人物の心情を捉える。
中学校 第1学年				
中学校 第2学年				
中学校 第3学年	基礎 B	4-2	イ 登場人物の言葉や行動の意味を理解する。	



② 「考えの形成」に関する設問の出題趣旨と学力段階別（準）通過率（％）

校種・学年		レベル	番号	出題趣旨・内容
小学校	第3学年	活用 S	4-4	エ 登場人物の行動について経験と結び付けて感想を書く
	第4学年	活用 A	4-4	ウ 人物の行動や気持ちについて考えて書く。
	第5学年			
	第6学年	活用 A	4-4	エ 人物の心情について考えを書く。
中学校	第1学年	4-5		
	第2学年	活用 A	4-4	エ ものの見方・考え方を捉えて考えを書く。
	第3学年	活用 A	4-4	ウ ものの見方・考え方について知識や体験と関連付けて考えを書く。



〔「文章の解釈」に関する設問の考察〕

小学校では人物の気持ち・性格・心情をつかみ、中学校では人物のより深い心情を捉えることを趣旨としている。小学校第6学年の全体の通過率が第5学年に比べて18ポイント下がっているのは、表現が直接的ではないことが挙げられる。第6学年からは直接的な表現が姿を隠し、会話文や行動描写から間接的に描かれた心情を汲み取らなければならないため、難易度が高くなっている。学習指導要領では言葉による見方・考え方を働かせることの重要性が説かれている。言葉による見方・考え方は、ものごとを捉える視点や考え方のことで、国語科においてはどの言葉に着目するか、着目した言葉からどのような考えを導き出すかである。言葉による見方・考え方を働かせるとは、言葉に着目して、吟味して、言葉への自覚を高めることであると考えることができる。その際には、どの言葉に着目するのかという視点が重要となる。視点として、色彩語、副詞（オノマトペを含む）複合動詞、比喩、倒置、繰り返し、文末表現等が挙げられる。

児童・生徒がどこに着目するかを自分自身で選び、自分で決め、自分なりの方法で自分なりの答えを見いだしていく過程、決められたことを、皆と同じようなやり方で、同じようにするやり方ではなく、一人一人が読み浸ることが求められる。読み浸ることによって豊かな感性が磨かれ、自分なりの学びが生まれる。

〔「考えの形成」に関する設問の考察〕

文章の形式ではなく、文章の内容に関して考えることを出題趣旨とする設問である。小学校第3学年の通過率は69.2%であり、R2は3との差は43ポイントであった。他学年と比べ段階差が大きい傾向にある。設問文で「おにの子はどんな気持ちか。あなたがおにの子ならどうするか」を問われ、二つのことについて自分の考えを書かなければならない。誤答類型を見ると、気持ちのみ書いた児童が64.7%となっている。この結果から、誤答した児童のうち7割近くが設問文の意味を十分に理解していなかったと読み取ることができる。小学校、特に低学年においては、文章のみならず今問われていることを正確に読む学習活動を児童の実態に合わせて丁寧に行わなければならない。

考えの形成においては、自分なりの考えをもつことが何よりも重要である。自分なりの考えが生まれるからこそ、「友達はどう考えるのか」「もっと違う考えがあるのではないか」等、他者と共に学ぶ協同の学びを必要とする。他者と対話しながら多様な読みに触れることによって自己の読みが広がったり深まったりする。協同の学びにおいても教師の指示で動くのではなく、自分自身が他者の力が必要だと感じ取ったときに、必要な他者を求めて、自らの意志で動き出すことが求められる。他者と学ぶ必要性を自らが感じ取り、他者と学ぶことによって他者から承認される喜びを味わうことによって自己肯定感も高くなると言える。それはまさしく、自己決定し、読み浸って、他者と共に探究する学びの構造転換の求めるところである。

【句読点の打ち方を理解すること 大問2 (3) 基礎C 53.1%】

文しょうは、点（、）をうつ場所によって、いみがかわります。つぎの文しょうに合う絵を、ア、イからえらび、記ごうで答えましょう。
 ・わたしは大きな声で、歌っている弟をよんだ。
 正答 ア（わたしが、大きな声で呼んでいる絵）
 イ（弟が、大きな声で歌っている絵）

■ 分析

全体の通過率は53.1%であった。段階別に見ると、R1=25.0%、R2=32.8%、R3=40.3%、R4=54.6%、R5=95.1%で、R3~R1の通過率が50%以下と基礎Cレベルとして低い。R1の無答率は32.4%で二択の解答形式であるにもかかわらず高い。

■ 考察

前回までの調査結果において毎年通過率が20%に達しないため、今回の調査では文意が分かる挿絵を添えた。そのために53.1%に上がった。読点を打つ位置によって主語がどのように変わるか、挿絵と照らし合わせる事ができる。「大きな声を出している」のが「わたし」なのか「弟」なのか挿絵では明らかである。それにもかかわらず通過率が50%台にとどまっている。読点を区切ると文が分けられ、意味が変わるといふ読点の役割が理解できていないのだと考えられる。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 文章を正しく理解する基礎・基本には、まず、語彙力と句読点の正しい使い方の理解が挙げられる。句点は文の終わりに打つので容易だが、読点については、打たなければ正しい意味が伝わらない場合と、打つ位置を変えることによって大きく意味が変わる場合の両面があることの指導が大切である。
 (2) 「句読点がなぜ必要か」。この学習課題に児童があらゆる手段を講じて取り組む。例文も解決方法も児童の自己決定に委ねる。「なぜ必要か」の答えを分かりやすく説明できるように、児童は課題解決に向かい学習に対する意欲が生まれる。句読点がない場合とある場合の違い、読点の位置によって文意が変わることの両面の違いに気付く。課題解決の探究過程においては、他者と協同して学ぶことが、考えを広げたり確かめたりするために有効であることにも気付いてほしい。音読するときは、文の意味を考えて句読点で間を取るようになり、互いの音読を聞き合う。文章を書くときにも、句読点をどこに打つたら正しく伝わる文になるのか、どのような意味になるのかを考えて具体的に書くようにする。個別に作り上げた答えをもち寄って交流するとき、句読点の役割の意味が確固たるものになる。

【文章の中から大事な言葉や文を捉えて書き抜くこと 大問4 (3) 活用A 29.4%】

「おにの子は知りません」とありますが、おにの子は何を知らないのですか。あとにつづくように、文しようにの中から書きぬきましよう。
 正答 (その) 立っている足もとに、たからものを入れたのはこがうまっていること。

■ 分析

全体の通過率は29.4%であった。段階別に見ると、R1=0.0%、R2=3.8%、R3=15.3%、R4=37.7、R5=61.2%であり。無答の割合は全体で13.4%である。

■ 考察

設問になっている文を読むと、「その立っている足もとに、たからものを入れたのはこがうまっているのを、おにの子は知りません。」と書かれている。この文から、おにの子が知らない内容を読み取ることができる。しかし、どの段階においても通過率が低い。同じように、文章の中から大事な言葉や文を捉えて書き抜く説明的文章（大問3 (3) 活用A）と比べると、学文的文章は34.6ポイント低い。このことから、書き抜く方法が分からないのではなく、場面の様子を内容に過不足なく正確に読むことができないために誤答が多くなっていると考えられる。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 文章の中から大事な言葉や文を捉えて書き抜きをするためには、①重要だと考えられる語や文を文章の中から見つける力。②語や文を正確に書き写す力、という2つの力が必要となる。今回は考察にある通り、②より①の力が不足していることが分かる。「いつ、どこで、だれが、何を、なぜ、どのようににしたのか、どんな出来事が起こったか」ということを捉えることによって、場面の様子を読み取り、物語の内容を正しく把握することが大切であると考える。
 (2) 小学校第3学年ということもあり、「自分の好きな場面を選び、紙芝居にしてその場面の文章を書き抜こう。」という課題を設け、自分の好きな場面を個別に選ぶ学習を取り入れる。選択させることで主体的な活動を促す。自分の好きな場面を見付けることで「場面」という言葉を理解するとともに、絵に描くことで「いつ、どこで、だれが、何を、どうしている」場面かということを理解しながら文章を読むことになる。
 絵の裏に書き抜いた文章を書くようにし、書いた人以外の人も読むようにする。相手意識をもてば、正確に書き抜くために、サイドラインを引いて確認しながら、一文字一文字を書かれていく通りに書き抜こうという必要感が生まれる。

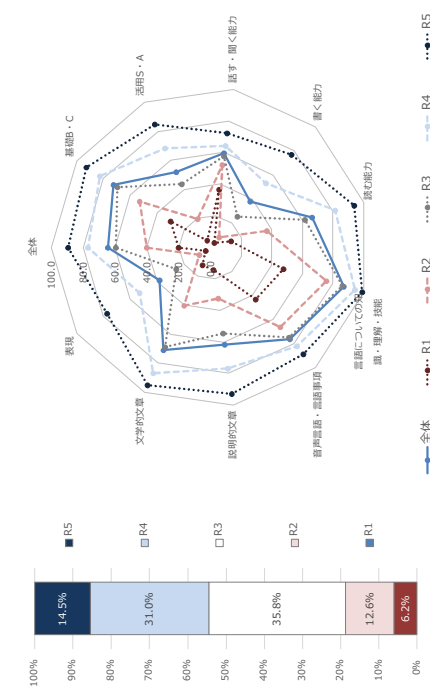
小学校第4学年

説明番号	出題		学習目標の観点					相関する知識					集積												
	内容	形式	設問レベル	1	2	3	4	5	A	B	C	D	E	(横) 達成率 (%)	(縦) 達成率 (%)	集積									
1	1	1	読みの中心に気を向け聞くこと	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	95.8	69.0	94.9	98.4	99.8	100.0	0.8	11.0	12.0	0.0	0.0	0.0
2	1	2	種類したり感想を述べたりすること	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	23.0	3.8	9.6	17.2	28.7	44.9	6.0	26.7	14.2	5.3	1.3	1.8
3	2	1	筋には時順や因果の順序が保たれていることを理解すること	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	97.2	75.2	95.8	98.9	98.8	100.0	0.5	7.6	0.2	0.1	0.0	0.0
4	2	2	登場人物の感情や態度を捉えること	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	89.3	43.9	77.4	95.4	97.2	100.0	0.5	6.6	0.0	0.0	0.0	0.0
5	2	3	問題を解いて解決方法を考えること	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	74.6	25.2	54.8	69.4	87.7	97.8	0.6	7.6	0.2	0.2	0.1	0.0
6	3	1	内容の中心となる語句や文意を捉えること	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	53.8	23.3	35.9	43.1	62.4	90.4	1.1	13.8	1.2	0.2	0.1	0.0
7	2	2	言葉と意味の関係を探ること	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	61.3	8.1	27.0	52.2	86.4	95.5	3.4	24.8	7.0	2.3	0.4	0.0
8	3	3	内容主旨の関係を捉えること	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	78.4	30.5	57.6	78.1	87.7	97.8	2.0	19.0	3.3	1.0	0.3	0.0
9	3	4	要点や細かい所に注目して読み、自分の考えをもつこと	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	38.0	4.8	22.8	50.0	76.8	91.1	4.9	36.2	12.6	2.7	0.0	0.4
10	3	5	文章の細かい所に注目して読み、自分の考えをもつこと	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	95.5	5.7	20.0	48.6	75.7	88.6	1.2	30.5	27.7	12.3	3.7	1.0
11	4	1	場面や場面ごとの内容を捉えること	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	83.5	16.2	57.8	86.4	96.4	99.8	2.6	29.5	5.4	0.3	0.0	0.0
12	4	2	登場人物の性格や態度を捉えること	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	82.3	22.9	56.6	84.1	94.8	99.0	2.7	29.0	5.8	0.4	0.1	0.0
13	4	3	登場人物の感情や態度を捉えること	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	85.9	19.0	62.5	90.8	97.2	98.6	7.1	53.3	23.1	2.7	0.0	0.2
14	4	4	人物や場面の変化を捉えること	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	59.8	1.0	14.7	55.9	85.6	95.5	11.1	60.5	33.8	8.1	0.8	0.0
15	4	5	文章の細かい所に注目して読み、自分の考えをもつこと	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	44.1	1.4	10.3	32.8	61.9	82.5	19.4	69.0	50.3	19.4	5.7	0.8
16	5	1	文章全体における筋の順序を捉えること	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	56.4	10.0	17.5	46.2	75.9	93.9	7.1	45.2	18.9	4.7	0.6	0.4
17	5	2	文章の細かい所に注目して読み、自分の考えをもつこと	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	23.2	0.5	2.8	10.5	33.0	60.8	12.8	60.0	34.3	11.8	1.6	0.4
18	5	3	登場人物の性格や態度を捉えること	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	34.5	1.4	4.7	20.5	49.6	76.8	20.3	68.1	50.3	21.6	5.7	1.6
19																									
20																									
21																									
22																									
23																									
24																									
25																									
26																									
27																									
28																									
29																									
30																									

■学習状況の判定（学力段階）、設問別の平均正答率 (%)

設問	%	平均正答率 (%)					
		全体	R1	R2	R3	R4	R5
18	1	64.4	20.1	40.1	59.4	77.1	89.6
11	61.1	72.4	29.7	53.2	69.5	82.7	92.6
7	38.9	51.7	4.8	19.7	43.5	68.2	84.8
2	11.1	59.9	36.4	52.2	57.8	64.2	72.5
3	16.7	38.0	4.0	3.3	25.7	52.8	77.2
10	55.6	66.4	13.3	36.5	61.7	81.7	93.9
3	16.7	87.0	47.8	76.0	86.2	94.6	99.3
5	27.8	76.2	43.2	66.5	74.9	82.4	88.5
5	27.8	61.6	14.5	32.7	54.4	75.6	92.7
5	27.8	71.1	12.1	40.4	69.0	85.7	95.1
3	16.7	38.0	4.0	8.3	25.7	52.8	77.2

■対象教科、段階・学年、出題範囲、対応教科書



レベル	学習状況の判定 (学力段階)				
	R1	R2	R3	R4	R5
全体	6.2%	12.6%	35.8%	31.0%	14.5%

レベル	学習状況の判定 (学力段階)				
	R1	R2	R3	R4	R5
国語科	10	55.6	66.4	13.3	36.5
小学校第4学年	4	22.2	52.8	77.2	38.0
小学校第3学年	4	22.2	52.8	77.2	38.0
小学校第2学年	3	16.7	25.7	52.8	77.2
教科書	3	16.7	25.7	52.8	77.2

【質問したり感想を述べたりすること 大問1 (2) 基礎B 23.0%】

あやかさんが大切にしているものについて、しつ問したいことを一つ書きましょう。(正答)例 あやかさんはどんなときにアルバムを開きますか。

■ 分析

「大切にしているもの」をテーマにした発表を聞いて、質問内容を考えて自由に記述する設問である。全体の通過率は23.0%であった。段階別に見ると、R1=3.8%、R2=9.6%、R3=17.2%、R4=28.7%、R5=44.9%であった。全ての児童・生徒に確実に習得させる基礎Bの設問であるため高い通過率を目指したが、全体の通過率はどの段階も低い結果となった。

■ 考察

発表は300字程度の原稿であり、いつ、どこで、誰と、何をしたのかが話されていて、内容は捉えやすいといえる。あやかさんが大切にしているものが「友達と一緒に写った写真」であることは、一つ前の設問で聞かれており、通過率が9割を超えていることから、放送内容の大体を聞き取ることはできていたと言える。

それにもかかわらず、通過率が伸びなかった要因としては、あやかさんが発表で話したことと重複した内容で質問を書いてしまう児童や、内容を聞き落としてしまう児童がいたのではないかと考えられる。また、大事なことを落とさずに聞くためには、メモの活用が必要となるが、それが不十分な児童がいたことも考えられる。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 授業の中で人の話を聞く場面はたくさんある。しかし、話を聞くときに重視されているのは話を聞く時の姿勢や態度であることが多い。話を聞くことで付けたい力は、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉えられるようになることである。そのために必要なメモを取りながら聞くことや、質問や自分なりの感想を考えながら聞くことを学習できるように計画していくことが必要となる。
- (2) どのような場面においても、児童が「聞いてよかった。」「もつと聞きたい。」「話してよかった。」「もつと話したい。」「思えるようにすることが大切である。そのためには、「話したい」と「聞きたい」が対話として充実し、学習者が「楽しい」と思える場の設定が必要である。例えば、日常の出来事から楽しかった出来事を伝え合って共有したり、お勧めしたい本についてその面白さを共有したりする場が考えられる。「もつと知りたいたい。」と思つたことを質問したり感想を出し合つたりしながら、話の内容を豊かにしていく。話し手と聞き手が話の内容を共有し楽しめるように教師は関わり、例えば話す順番は学習者の自己決定に委ねる。

【書き手の考えの明確さなどについて考えを述べること 大問5 (3) 活用S 34.5%】

上の文章で、よい点やくふくんでいると思う点を見つけてみましょう。そして、どうしてそう思ったのか、理由を入れて書きましょう。(正答)例 こうもくが分かれている点や、「分かったこと」がかじょう書きになっている点が、よみやすくよいと思います。

■ 分析

報告文の特徴を捉え、よい点や工夫している点を理由とともに記述する設問である。全体の通過率は34.5%である。段階別に見ると、R1=1.4%、R2=4.7%、R3=20.5%、R4=49.6%、R5=76.8%となっている。誤答例を見ると、考えを書くことができたとしても、その内容に整合性がないことが分かる。

■ 考察

文章を読むときに「初め・中・終わり」の構成で話の全体を捉えることや、自分の思いや考えが明確になる構成で文章を書く活動は低学年から習得しており、三部構成の文章には慣れていると考ええる。また、本文は、「初め・中・終わり」の書き出しにそれぞれはじめに「>>>分かったこと>>>終わりに」と小見出しが付いており、構成は捉えやすいといえる。本文が「初め・中・終わり」の構成であることは理解できても、全体における各段落の役割を捉えることができていることができていなかったり、書き方の特徴(箇条書きや図を入れる)のよさに気付くことができなかったりしている。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 報告文の特徴を捉えるためには、文章の内容だけでなく、構成の形式や表現の仕方等に気付くことができる力を養うことが大切である。実際に報告文を書く活動も必要であるが、様々な報告文を読み、構成の形式や優れた表現に気付いたり、その表現のよさを理解したりすることも大切である。文章の構成や表現のよさを理解できれば、自分の考えを伝えたいときに表現しやすくなると考えられる。
- (2) 少しでも読み手が読みやすく、内容が分かるとなる学習を設定する。そのために、教師が用意した「原稿用紙のマス埋めるように書かれている文章」を読み、学習課題「読み手が読みやすくなるように書き方をくふうしよう。」に取り組み、学習者が課題解決のために、個別に又は仲間と検討を繰り返しながら幾つかの解決策を考え出していく展開である。学習者同士で考えを比較したり質問をして確かめたりすることで、自分なりの考えを広げ深めることができると考えられる。仲間から提案された案のよさを話し合うことで学びの内容が充実すると考えられる。

【語句の類別を理解すること 大問2 (1) 基礎C 36.8%】

何を表す言葉かを目を向けて言葉を分類しました。分類がちがっているのはどれですか。次から一つ選び、記号で答えましょう。(正答)エ 物語・読む・悲しい

■ 分析

語句の類別を理解する設問で解答形式は選択で、ア～エの選択肢がある。通過率は36.8%で基礎Cとしては低い。段階別通過率はR1=6.7%、R2=12.6%、R3=26.1%、R4=50.8%、R5=94.8%であった。特徴的なことは、R5と4との差が44ポイントあることである。

■ 考察

通過率が低い理由を誤答類型で見ると、「大きい・白い・うつくしい」が31.5%で最も多い。どれも性質上は同じ語句で形容詞であるが、そうではなく、「大きな言葉」「色の言葉」「見た目の言葉」と捉えていることが分かる。設問文にある「何を表す言葉か」を目を向けて分類するの「何を表す言葉か」の意味が理解できていなかったのではないかと推測できる。

■ 学びの構造転換に向けて

(1) 「何を表す言葉か」の意味は、語句の「性質」を表す。語句の「性質」とは、物の名前を表す語句、動きを表す語句、様子を表す語句等、品詞のことである。小学校では「品詞」の用語を扱わないが、言葉は何を表すかという概念は指導する必要がある。また、言葉を上位語・下位語で捉えたり、「言葉の樹形図」を作ったり言葉を構造的に捉えたりする言葉の概念形成は必要である。語句を「分類」するためには言葉の共通点と相違点を考え、論理的な思考力を働かさなければならぬ。根本的には語彙力を豊かにする指導の改善・充実を図ることが急務である。そのため、国語科の学習が読書活動に結びつくように工夫したり、「話す」「書く」といった言葉を表出したりする場を多く設ける。日常的に言葉の感度を高め、言葉にこだわらざる環境作りも大切である。

(2) 児童が「語句の性質や役割を知ると便利だ」と実感でき、学ぶ必然性が感じられるような場の設定や手だてを講ずることが必要となる。例えば、「〇〇は、□だ。」の口に、「できるかぎり様子を詳しくする言葉(形容詞等)を考えてみよう」という学習の場を設定する。場の設定を児童が各自決めて提案することも効果的である。提案した場を具体例として、どのように感じ取るか、どんなことを考えるかな等を交流する。いろいろな感じ取り方があることや多様な考え方ができることが実の場で学ぶことができる。

【事実と意見の関係を考える設問 大問3 (2) 基礎B 54.1%】

＜考えたこと＞の段落の役割について説明したものを、次から一つ選び、記号で答えましょう。(正答)エ

■ 分析

全体の通過率は64.6%で、段階別通過率はR1=11.1%、R2=26.8%、R3=61.9%、R4=92.0%、R5=92.4%であった。R4の通過率に比べて、R3の通過率が30ポイント低く、R4と3との段階差が大きくなっている。

■ 考察

誤答として最も多かったのは、ア「なぜこんなことか、調べた理由」である。＜考えたこと＞の段落には、混雑する理由が書かれており、「そのため、図書室がこんなことです。」と結論まで書かれている。そのため、＜考えたこと＞の段落には、「なぜこんなことか、調べた理由」が書かれていると判断したと考えられる。しかし、それは段落の内容についてであり段落の役割ではない。段落の役割という意味を理解できていなかったと考えられる。

■ 学びの構造転換に向けて

(1) 事実と感想、意見などの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えることは高学年の指導事項である。説明的な文章には、大きく分けて頭括型、尾括型、双括型の三つある。今回の文章は尾括型である。児童が文章の構成や段落の役割を考えられるように、多くの形式の文章を読み、それぞれの形式のよさをつかむことが必要になる。文章の読みの学習では、内容を読み取り、要約する学習と同じ時に構成の役割に注目できるような学習が不可欠である。児童は内容の理解と段落の役割の理解を混同したり誤解したりしてしまう傾向がある。

(2) 文章の構成によって内容が読み手に伝わりやすくなるという事実を児童が理解できる学習を展開する。その際、その学習を行ったことに満足でき、生活に使っていきたいと実感できる取り組みが必要になってくる。例えば幾つかの学習材を用意し、内容がよりよく伝わる構成はどれか」を比べ、児童が個別にあるいは数人で、伝わり方の違いがどうなるかを検討する。その際に、考えを支える根拠・理由を明確に説明できるようにする。「何を伝えたいか」(内容意識)、誰に伝えたいか」(相手意識)「どのように工夫すればよく伝わるか」(方法意識)を自己決定させ主体的に学びを展開する。自分で選択することで、段落をどう組み立てるかにあつての意欲が高まる。それを他者と交流することで多様な考えが生まれ、段落の役割についても深く理解することができる。

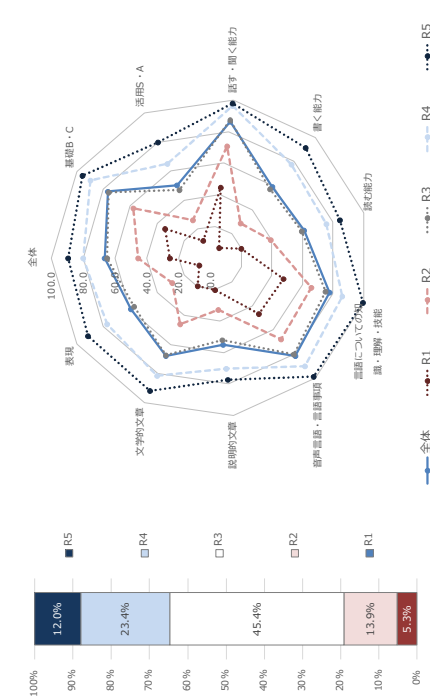
小学校第6学年

説明番号	出題					授業内容の領域					授業													
	内容	解答形式	設問レベル	1	2	3	4	5	A	B	C	D	E	(検) 達成率 (%)	標準									
1	1 1 読し手の意図を読み取る	選択	通常	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	■	■	■	■	■	83.2	37.9	65.8	84.1	95.6	0.3	3.4	0.4	0.1	0.0	0.0
2	1 2 読し手の意図を読み取る	自由回答	複合条件	活用A	活用A	活用A	活用A	活用A	●	●	●	●	●	89.3	50.8	91.2	97.2	96.5	2.9	23.2	6.1	1.8	0.1	0.0
3	2 1 漢字の由来、特徴などについて理解すること	選択	通常	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	■	■	■	■	■	95.0	63.8	98.7	97.1	99.5	100.0	0.1	2.3	0.0	0.0	0.0
4	2 2 文や言葉に込められている感情を読み取る	選択	通常	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	■	■	■	■	■	92.5	95.9	94.3	93.9	98.2	100.0	0.2	3.4	0.2	0.0	0.0
5	2 3 言葉の持つ力や効果を読み取る	選択	通常	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	■	■	■	■	■	45.8	18.6	24.0	34.1	60.5	98.5	0.5	4.3	0.9	0.2	0.0
6	3 1 文章の内容を要約的にまとめる	選択	通常	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	■	■	■	■	■	92.0	98.8	94.3	93.6	97.2	99.7	0.3	5.6	0.2	0.0	0.0
7	3 2 事象と因果、感情の関係を押さえる	選択	通常	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	■	■	■	■	■	48.7	14.7	22.7	42.3	69.9	76.6	0.5	6.2	0.7	0.2	0.0
8	3 3 文章の関係を捉える	選択	通常	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	基礎C	■	■	■	■	■	68.0	21.5	36.2	66.5	87.7	92.7	0.8	7.9	1.1	0.4	0.3
9	3 4 自分の考えを広げたり深めたりすること	選択	通常	活用B	活用B	活用B	活用B	活用B	●	●	●	●	●	9.8	0.0	2.8	5.6	18.1	22.4	7.3	34.5	17.6	5.8	1.5
10	3 5 自分の考えを明確にすること	自由回答	複合条件	活用B	活用B	活用B	活用B	活用B	■	■	■	■	■	95.4	6.2	19.2	52.3	78.7	94.2	12.2	42.9	29.6	10.8	3.5
11	4 1 登場人物の相互関係を捉える	選択	通常	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	■	■	■	■	■	90.9	30.5	78.4	95.3	98.8	100.0	0.5	9.0	0.0	0.1	0.0
12	4 2 場面について理解すること	選択	通常	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	■	■	■	■	■	61.9	20.3	27.9	57.4	85.0	91.9	0.7	10.2	0.4	0.1	0.0
13	4 3 場面について理解すること	選択	通常	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	■	■	■	■	■	86.3	31.1	67.3	89.6	97.2	99.2	1.0	11.3	2.0	0.2	0.0
14	4 4 自分や他人の感情を読み取る	選択	通常	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	■	■	■	■	■	79.8	15.4	52.7	83.1	94.1	99.2	4.8	36.2	15.3	2.3	0.0
15	4 5 自分や他人の感情を読み取る	自由回答	複合条件	活用B	活用B	活用B	活用B	活用B	■	■	■	■	■	20.3	0.0	1.5	10.2	31.5	67.5	11.8	46.9	25.7	10.7	2.8
16	5 1 考えを明確に表現すること	選択	通常	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	基礎B	■	■	■	■	■	81.2	18.1	55.1	83.8	96.6	99.5	1.5	13.6	3.9	0.3	0.3
17	5 2 表現の効果を捉える	選択	通常	活用B	活用B	活用B	活用B	活用B	■	■	■	■	■	68.9	5.1	24.8	69.6	93.4	98.0	7.2	42.4	21.8	3.9	0.5
18	5 3 表現の仕方に注目して理解すること	自由回答	複合条件	活用B	活用B	活用B	活用B	活用B	■	■	■	■	■	27.8	2.3	6.5	17.1	42.2	76.3	10.9	48.6	25.3	9.3	2.5
19																								
20																								
21																								
22																								
23																								
24																								
25																								
26																								
27																								
28																								
29																								
30																								

説明	%	平均達成率 (%)					
		全体	R1	R2	R3	R4	R5
18	61.1	66.6	25.3	45.5	64.8	80.1	89.5
7	38.9	76.9	34.1	57.7	76.1	89.7	95.9
		50.4	11.5	26.2	47.0	65.0	79.6
		全体	活用B・C	活用B・A	活用A・A	活用A・B	活用A・C
2	11.1	86.3	44.4	70.9	87.6	96.4	97.9
3	16.7	59.3	8.5	28.8	56.8	77.4	91.3
10	55.6	61.4	19.9	39.3	59.6	75.8	84.4
3	16.7	77.8	47.5	65.6	75.0	86.1	99.5
5	27.8	81.2	46.2	67.8	80.1	90.2	98.6
5	27.8	55.0	20.2	33.0	52.1	70.3	77.1
5	27.8	67.9	19.7	45.6	67.1	81.3	91.6
3	16.7	59.3	8.5	28.8	56.8	77.4	91.3
		全体	活用B・C	活用B・A	活用A・A	活用A・B	活用A・C

説明	%	学習状況の特定(学力段階)					
		S	A	B	C	D	
18	61.1	4	22.2	6	33.3	6	33.3
7	38.9	5	27.8	5	27.8	5	27.8
		11	61.1	11	61.1	11	61.1
		11	61.1	11	61.1	11	61.1
		6	33.3	6	33.3	6	33.3
		11	61.1	11	61.1	11	61.1
		6	33.3	6	33.3	6	33.3

■学習状況の特定(学力段階)、設問別の平均正答率 (%)



教科書	国語科
校編・学年	小学校第6学年
出題範囲	小学校第6学年
対応教科書	地方国語出版

■対象教科、校編・学年、出題範囲、対応教科書

【日常よく使われる敬語の使い方に慣れること 大問2 (3) 基礎C 45.8%】

「言う」のけんじょう語はどれですか。次から一つ選び、記号で答えましょう。
ア おっしゃる イ 言います ウ 申し上げます エ お話しする 正答ウ

■ 分析

全体の通過率は45.8%である。段階ごとの通過率は、R1=18.6%、R2=24.0%、R3=34.1%、R4=60.5%、R5=98.5%であり、段階間の差が大きい。誤答を見ると、アが39.1%と正答に次いで多く、イが11.1%であった。

■ 考察

基礎Cレベルの設問で段階差が大きい背景には、敬語の定着の困難さがあると考えられる。特に、敬語の中でも児童にとって謙讓語の理解は難しい。また、アの尊敬語を選んだ児童が多いことから、尊敬語は相手が行う行為の動詞を変化させるものであり、謙讓語は自分の行為の動詞を変化させて相手への敬意を表すことの区別を正確に理解することができていないことが分かる。主語を補って判断することが手だてになる。敬語は日常生活の中で使うことにより初めて身に付くものであることから、敬語を使う機会が多い児童と少ない児童で差があるのではないかと考えられる。特に謙讓語を使う機会が少ないため、児童にとって身近でないことが大きい。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 日常よく使われる敬語を理解し、使い慣れるようにしていくことが高学年の指導事項である。児童自身が、敬語の役割や必要性を自覚できるようにしていくことが大切である。そして、相手、目的や意図、場面や状況に応じて、言葉遣いを選んで適切に使えるようにしていく。そのために具体的に相手に相手と自分の立場を確認して使い方を理解していく必要がある。言語感覚を養うことは、言語活動を充実させ、自分なりのものの見方や考え方の形成にも役立つはずである。
- (2) 児童が敬語を理解し意欲的に身に付けていきたいと思える学習が展開されるために、自分の生活に着目できる学習にすることが必要である。丁寧語、尊敬語、謙讓語を表に整理して掲示し日常的に意識できるようにすることも環境として望ましい。敬語の必要性を自覚し、使用できる場を学習者の自己決定を基軸に設定していく。例えば、児童が個別に敬語を使う場面を決め、実際の文章を個別に又は仲間と検討し、実践する。敬語が相手の方のために効果的であったかどうかを振り返りの観点にする。実際に使う場面を増やし他教科や学校行事と関連させていくカリキュラム・マネジメント上の工夫をしていく。

【登場人物の相互関係を捉えること 大問3 (4) 活用A 9.8%】

千円札などの紙へいにも、和紙が使われているのはなぜだと思いますか。上の文章をもとにして、あなたの考えを書きましよう。
正答(例) 紙へいは、ノートや色紙のように破れてはいけないので、水ですつても破れにくい和紙が使われていると思う。

■ 分析

全体の通過率は9.8%であった。段階別では、R1=0%、R2=2.8%、R3=5.6%、R4=18.1%、R5=22.4%であった。この設問の解答形式は複合条件で、「叙述から必要な情報を見付け」「自分の考えを書く」という二つの要素を満たすことが要求される。抽出口の誤答のうち片方の要素のみ満たしている誤答が33.4%のぼった。

■ 考察

通過率が低い要因の一つに、複合条件で課題を解決する活動が日頃から行われていないことが挙げられる。「筆者の考えや事実に対する自分の意見を書く」「叙述から根拠を見付ける」というように、一つの課題を解決する活動は行われている。しかし、この設問のように「文章中には出てこない『紙幣』が『和紙でできている理由』を『叙述をもとにして』『自分で考える』といった複合的な課題解決の経験は少ないのではないかと考えられる。さらに、根拠となる情報を見付ける力が十分でないことも誤答から分かる。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 「叙述から根拠を見付け、根拠から理由付けをし、根拠と理由を基に自分の考えを明確にする」考え・根拠・理由の三角ロジックを踏まえて自力解決を行うことにより、明確な視点をもって考える力が育まれる。また、学習材の文や文章を基にして、そこには出てこない事象についても考える活動を取り入れる。これからの世の中は児童にとって未知の世界である。身近な学びや知識を駆使してなんとか解決しなければならぬ課題に向かうことが日常のこととなる。そのためにも、想定外の課題に対して根拠を基に自分の考えを述べる力は不可欠となる。
- (2) 学習課題解決に向かう例として、次のようなものが考えられる。
 - ・ 問いを基に、自分なりの学習課題を立てる。(時には、教師の考えた課題)
 - ・ 自分なりの方法で、自分なりに解決する。
 - ・ 一人での解決が難しい場合は、友達に相談したり、課題を変えたりする。
 - ・ 自分と同じ課題や違う課題の友達と協同して学ぶ。
 - ・ 交流する時や交流の相手は自分が必要な時に必要に応じて自由に選ぶ。

【文章の内容を的確に押さえること 大問3 (1) 基礎C 51.4%】

この文章を、次のような見出しをつけて大きく四つに分けました。イとウの項目の中の、□に入る段落番号を、それぞれ書きなさい。

- ア 「本能について」 ……1～4
 - イ 「本能」の欠点 ……5～□
 - ウ 「知能」についてと、その欠点 ……□～16
 - エ 「知能」を使うことができる生物 ……17～18
- 正答 イ 9 ウ 10

■ 分析

全体の通過率は51.4%であった。段階別に見ると R1=11.0%、R2=20.2%、R3=46.6%、R4=66.5%、R5=98.6%である。基礎Cの設問としてはR3以下の通過率が低く、段階差が大きい。無答率を見るとR1が7.9%だが、その他の段階はほぼ0%である。

■ 考察

本文では、「こうした柔軟な対応ができるように発達したのが「知能」である。」との表現が第11段落にあり、ここで「知能」という言葉が本文中で初出であることから、ここを第3のまとまりの初めと考えた生徒が多いのではないかと考えられる。また、第10段落に「それでは」という接続詞があり、続いてその文末が「～してはどうだろうか」と話題を転換させている。このことに気付けば正しい答えが導かれるはずだが、そこに着目できなかつたと考えられる。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 説明的な文章を読むときは、まず、筆者は「何を伝えたくてこの文章を書いたのか」という内容の大意を捉える視点が必要であり、そのための指導事項として、接続詞、文末表現などに着目し、文章中での役割について理解することである。
- (2) これまでの説明文の学習では、本文を通読し、各段落の内容などを確認した後、本文の要約や段落相互の関係について考えるという流れが一般的だと考えられる。そこで、学習者主体の学びの手だてとして、本文を通読した後、おおまかな内容を生徒が互いに説明したり、幾つかのまとまりに分けて内容を自力で要約したりして発表するなどの活動を行うことが考えられる。その際、あらかじめこちらから要約の方法や着眼点、指示語等の使い方を示すということはせず、生徒の活動の進捗状況を見ながら適宜基礎的な指導事項について助言することが必要である。

【場面に付いての描写を捉えること 大問4 (2) 基礎B 57.8%】

——線②「自分のまわりの音が全部消えたような気がした。」とありますが、この表現から「真歩」のどのような様子がわかりますか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 答えを出そうと考えたが、あきらめた様子。
 - イ 心の中にある理想の姿が消えてしまった様子。
 - ウ 自分で答えが出せず、耳をふさいでいる様子。
- (正答) エ 音が聞こえないほど深く考えに集中している様子。

■ 分析

全体の通過率は57.8%であった。他の設問に比べて通過率が低く、第5・6学年の指導事項である「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写を捉え、自分の考えをまとめること」の定着度の差異が分かる。また、誤答率はイが最多であった。

■ 考察

——線②後の「ふと……頭に浮かぶ。」という一文から「見えていなかったものが、(この一文で)見えるようになった」と読み取られ、イの誤答につながった可能性が考えられる。ここでは、——線②の前にある心情や描写の読解が重要であり、奈津季の「どうなのおまえは?」という問いに、真歩が「聞かれて黙った」ことや「まだ自分で答えが出せない」ことを踏まえたり、「真歩は、前キヤブテンの奈津季に悩みを相談している」という最初の一文を踏まえたりすることができれば、真歩の考え込んでいる様子が読み取れるのではないかと考えられる。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 場面や部分に分けてではなく、作品全体を通して読解を進めることが大切である。その中で、登場人物の心情の移り変わりや変化が起きた部分について、出来事や言動に着目して捉えていくことが求められる。その部分の前にはどのような出来事があり、登場人物の言動がどのように変化に影響しているかを、その前後の心情と比較して読み取りながら内容を解釈することが必要である。
- (2) 生徒が主体的に学習計画を立て、学び方を選択していくような展開が必要である。例えば、「主人公の心情変化を捉える」という課題を立て、着眼点を「主人公の言動」「他の人物の言動」「作品設定や人物設定」等から選択させて学習を進める。そうすることで作品や人物に対する多様な読みが生まれ、それぞれの視点からの学びを、対話を通して共有したり議論したりしながら考えていくことになり、多面的・多角的に内容を理解し、深い学びに至ることが可能になる。

【文章の構成や展開・表現の特徴について自分の考えをもつこと 大問3 (5) 活用A 66. 8%】

筆者は、14 段落で「私たちは意識的にコミュニケーション能力を高める必要に迫られています」と述べています。このことについて、あなたの考えを次の〈条件〉に従って書きなさい。

〈条件〉① 自分が経験した具体的な事例を基にして書くこと。
 ② 八十文字以上、百字以内で書くこと。

解答例 私も、SNSなどで、文字だけのコミュニケーションで意図が伝わらなかつたり、誤解を生んだりしたことがある。非言語によるコミュニケーションの大切さを理解し、よりよい人間関係をつくっていききたいと思う。

■ 分析

通過率を段階別に見ると、R1=13. 8%、R2=42. 3%、R3=69. 6%、R4=89. 4%、R5=87. 6%である。誤答例を見ると、「内容が不適切、または、意味が通らない」が13. 7%と高く、次いで「字数を守り、自分の考えを書いているが、自分が経験した具体的事例を基にして書いていない」が6. 2%であった。

■ 考察

この設問は、筆者の考えを正しく読み取り、自らの経験と結び付けて考えをまとめることを求めている。上記の結果から、普段から身の回りの物事に対して自分との関わりを捉えたり、問題意識をもって考えたりすることに慣れていないことが分かる。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 文章に対して自分の考えをもつためには、大前提として内容を正しく読み取る力を付けることが重要で、指導者は「文章の構造と内容の把握」→「精査・解釈」→「考えの形成・共有」の過程を意識した学習を展開する必要がある。説明的文章を読むときは内容と形式の両方から解釈する。特に筆者が内容に説得力をもたせるために、どのような事例を挙げて説明しているか、事例が考えの根拠となり得ているか、論理の展開が妥当かという観点で読むことが極めて重要である。
- (2) 説明的文章に対する学習者の興味・関心は各自違ってくるため、学習者自らが何を学びたいのか、どんな問いをもって読むのか、課題を自らが決め、自分なりの計画を立て、自分なりの仕方 で解決する学び方が求められる。また、協同しながら考察を深めたりすることも有効である。読み手をもつ知識や経験は異なるため、そこから生まれた多種多様な考えを他者と交流することで、新たな気づきを促し、一層の深まりや広がりを感じさせることができる。

【題材の捉え方、材料の用い方、根拠の明確さなどについて考えをもつこと 大問5(3) 活用S 10. 8%】

報告文の「3 調べた内容」の「③インターネットの利用状況に関する経験」をよりわかりやすくするために助言をします。助言の内容と理由を書きなさい。

正答例 根拠がはっきりしないので、具体的な数字やグラフが入った資料を提示することで、どのように数値が高くなっているかなどが、よりわかりやすくなると思う。

■ 分析

全体の通過率は10. 8%であった。段階別に見ると R1=0. 9%、R2=2. 6%、R3=9. 2%で、R4=11. 6%、R5=31. 5%であり、全体的に低いことが分かる。無答率は全体で29. 2%、段階別に見ると、R1=73. 3%、R2=47. 5%、R3=25. 8%、R4=18. 2%、R5=9. 2%となり、R1・2は特に無答率が高い。

■ 考察

この設問は、提示された報告文の改善点を見付け、それに対する助言をその根拠とともに考える設問である。報告文の部分的な誤りを見付けるのではなく、「よい報告文」を考えたいうえで改善点を指摘しなければならぬため、総合的な表現力が求められる。また、「読み手」として「分かっていく部分」に気が付くとともに、「書き手」として「分かりやすい表現」とはどんなものかを考えなければならぬ設問である。そのため、通過率が低かったと推測する。

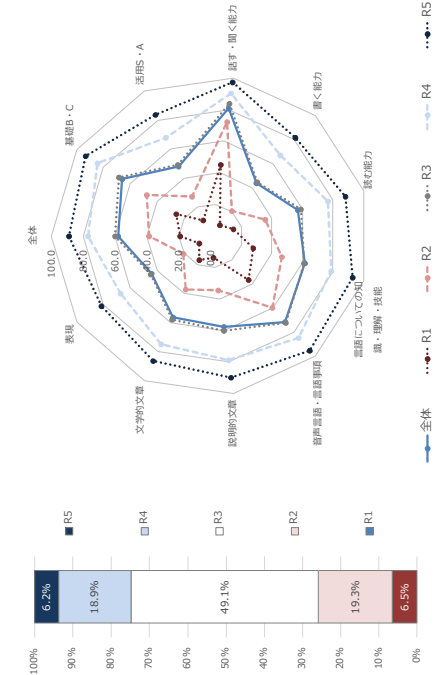
■ 学びの構造転換に向けて

- (1) この設問で求められている力は、学んだり調べたりしたことを分かりやすく伝える活動のみでなく、学習のあらゆる場面で身に付けることができる。教科書の内容をプレゼンテーションやポスター制作、スピーチなどの表現活動につなげたり、パネルディスカッションやディベートなどの話し合い活動を行うことはもちろん、教科書を批判的に読んで改善点を提案したり、リライトしたりすることによって多様な視点を身に付けることができる。
- (2) 上記の活動を形式的に行うだけでは、内容の紹介や要約的なものに終わってしまふ。分かりやすく伝えることを学習課題とし、そのために、必要な情報と不要な情報の取舍選択をどのようにすればよいか、どんな根拠があれば説得力が増すのか等について、試行錯誤を繰り返してよいものにしていく。自分たちの発表あるいは作品は分かりやすかつたかどうかなどを、学習者同士の対話的な学びを通して意見を出し合い、考えを深め、表現力を高めていくことが大切である。

中学校第3学年

説明番号	出題		学習目標の観点					授業の領域					評価基準 (%)																
	形式	内容	読解	読解	読解	読解	1	2	3	4	5	A	B	C	D	E	1	2	3	4	5								
1	選択	どのよな表現や展開しているかを考えて書く	選択	選択	選択	選択	●					■					72.2	40.8	60.2	74.2	82.5	95.9	0.8	7.7	1.0	0.1	0.0	0.0	
2	選択	論理的な構成、展開に注意して書くこと	選択	選択	選択	選択	●					■					90.0	46.2	84.1	93.5	98.1	99.2	1.5	14.6	1.8	0.4	0.0	0.0	
3	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					62.1	34.6	46.9	61.5	78.0	91.1	0.3	3.1	0.0	0.2	0.0	0.0	
4	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					60.9	26.8	46.9	60.5	78.8	94.3	0.5	5.4	0.5	0.1	0.0	0.0	
5	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					72.3	20.0	49.5	77.3	92.3	97.6	0.2	3.1	0.0	0.0	0.0	0.0	
6	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					63.0	23.1	35.9	66.1	86.2	94.3	0.5	6.9	0.0	0.0	0.0	0.0	
7	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					65.4	14.6	45.3	67.4	89.1	93.5	0.9	7.7	1.0	0.3	0.0	0.0	
8	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					26.0	2.3	6.8	25.1	41.1	72.4	16.9	60.0	31.3	11.4	5.8	0.8	
9	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					61.1	8.5	34.4	65.5	85.4	91.1	13.8	60.0	31.3	7.4	1.1	0.0	
10	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					53.3	20.8	34.6	53.3	74.5	81.3	1.1	10.8	0.8	0.3	0.0	0.0	
11	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					26.0	1.5	8.9	24.3	41.1	72.4	26.9	71.5	44.8	23.2	10.9	3.3	
12	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					65.8	11.5	37.5	70.6	91.5	95.1	20.5	69.2	39.6	15.4	4.0	0.8	
13	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					65.5	23.8	41.9	69.5	85.1	91.1	7.3	35.4	3.4	0.8	0.8	0.8	
14	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					47.5	2.3	16.1	48.2	80.6	88.2	8.3	49.8	15.4	4.9	1.3	0.9	
15	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■					19.4	0.0	3.6	15.8	35.3	67.5	30.9	73.1	54.7	25.9	13.8	4.9	
16	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
17	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
18	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
19	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
20	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
21	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
22	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
23	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
24	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
25	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
26	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
27	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
28	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
29	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	
30	選択	論理的な構成、展開に注意し、自分の考えと比較すること	選択	選択	選択	選択	●					■																	

■学習状況の評定（学力段階）、読解別の平均正答率 (%)



読解	平均正答率 (%)	R1	R2	R3	R4	R5
全体	58.1	19.1	38.7	59.8	77.1	88.8
基礎	66.1	25.6	47.6	68.2	84.4	93.0
基礎・C	48.0	10.8	27.3	49.0	67.6	83.4
基礎・A						
基礎・B						
基礎・D						
基礎・E						
基礎・F						
基礎・G						
基礎・H						
基礎・I						
基礎・J						
基礎・K						
基礎・L						
基礎・M						
基礎・N						
基礎・O						
基礎・P						
基礎・Q						
基礎・R						
基礎・S						
基礎・T						
基礎・U						
基礎・V						
基礎・W						
基礎・X						
基礎・Y						
基礎・Z						

学習状況の評定 (学力段階)	R1	R2	R3	R4	R5
基礎	6.5%	19.3%	49.1%	18.9%	6.2%
基礎・C					
基礎・A					
基礎・B					
基礎・D					
基礎・E					
基礎・F					
基礎・G					
基礎・H					
基礎・I					
基礎・J					
基礎・K					
基礎・L					
基礎・M					
基礎・N					
基礎・O					
基礎・P					
基礎・Q					
基礎・R					
基礎・S					
基礎・T					
基礎・U					
基礎・V					
基礎・W					
基礎・X					
基礎・Y					
基礎・Z					

【語句や文の使い方、段落相互の関係などについて確かめること 大問5 (2) 活用A 47.5%】

一線「けれども」を適切な言葉に書き直しなさい。また、その言葉を用いる理由を、5段落がもつ役割を考えて書きなさい。
 正答 適切な言葉：たとえば
 理由：「私たちができていること」の具体例を挙げている段落だから

■ 分析

全体の通過率は47.5%であり、段階別に見ると R1=2.3%、R2=16.1%、R3=48.2%、R4=80.6%、R5=86.2%であった。R3の通過率は半数に満たず、R4・5の通過率も他の設問と比較して低い。誤答の類型は、『けれども』を書き直していないものが9.9%、「内容が不適切、又は意味が通らない」が25.8%であった。

■ 考察

R1～5に共通して他の設問よりも通過率が低く、段落どうしの結び付きに着目して、まとまりごとに内容を読み取る力が不足していることが分かる。誤答の状況から、前の段落で「私たちが出来ることを考える必要性」を述べ、5段落で具体的な改善策を例示しているという構成が、正しく読み取れていないことが分かる。「たとえば」という接続語がその後の具体例を挙げる文章につながるということが理解できていない。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 意見文は、筆者が読み手や聞き手に筆者の考えを分かりやすく伝えることを旨とする。そのため、どのような段落構成にしたら、そのねらいを果たせるかを検討の中心に置かなければならない。さらに、考えを伝えるためには、意見とその意見の根拠になる部分を効果的に構成していく必要がある。その際、段落をつなぐ適切な接続語にも注目する。大問5の文章では、中心的な部分の後に付加的な部分が続べられるという論理の展開である。意見(中心的な部分)→事実・根拠・具体例(付加的な部分)というまとまりから、その構成の効果を考えたい。
- (2) 意見文の文章構成に着目し、クラスの仲間が内容について納得できるような構成案に基づいた意見を発表する展開を組み立てる。学習課題は「読み手に意見を伝えるために効果的な文章構成を考える」として、特に意見・事実・根拠・具体例を構成要素と接続語の選び方に考慮しながら、課題解決に向かうようにしたい。個人やグループ等学習者が解決に向けて試行錯誤する方法を選択する。ディベートやプレゼン等、実際の場面を捉えて取り組みたい。聴衆となる仲間には、話し方ではなく内容の構成に着目するように視点をもちたい。

【文章全体と部分の関係内容を理解に役立てること 大問3 (2) 基礎B 63.0%】

文章の中で、4段落はどのような役割を果たしていますか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
 正答イ 3段落までの内容に対して新たな見方を示し、筆者の主張の根拠を示す役割。

■ 分析

全体の通過率は63.0%であり、段階別に見ると R1=23.1%、R2=35.9%、R3=66.1%、R4=86.2%、R5=94.3%であった。抽出校の誤答率を見ると、ウが13.4%、アが11.5%、エが9.0%と一定数いる。

■ 考察

正答を導き出すためには、3段落と4段落の内容がどのようなつながっているのかを適切に読み取ることが必要となる。正答は前段落の内容に対して「新たな見方を示し…」である。他の三つの選択肢である「反論」「言い換え」「一般的な論説の提示」ではないと判断するためには、4段落の冒頭の「むしろこう考えた方がよいのではないうだろうか。」を正しく理解することが必要となる。段落の書き出しの叙述を読み、意味を捉えることでつながりを判断できる。その学習が不可欠である。

■ 学びの構造転換に向けて

- (1) 段落相互の関係をつまえる際には、指示語、接続語や中心文に着目する必要がある。また、表現されている内容が理解できても、設問の選択肢にある抽象化された相互関係の意味を捉えられないことも考えられるため、各段落の関係や役割を小見出しにしたり一文でまとめたりするなどの学習が必要であると考える。段落相互の関係を検討して文章を構成すると、聞き手や読み手には内容が分かりやすく伝えることにも気付け、日頃目にする文章に関心がもてるようにしたい。
- (2) 幾つかの論説文を比べ読みし、文章の構成に着目できるようにする。学習者が意欲的に取り組むことが、学習者の学びへの意欲と探究の力を伸ばすことにつながる。結果的に学習内容を身に付けることの成果も上がるようになる。そこで、まず幾つかの論説文を用意し、比べ読みを行い、「最も筆者の考えが説得力のある段落構成で著されている論説文を選択する」ことを学習課題として、自分なりの根拠を基に選ぶ。根拠を検討することに個別の学びが発揮される。選んだ文章について学習者同士が意見交流を行う。そのことにより多様な考えを知るきっかけにもなり、多様な考えをもち寄ることで学ぶ内容は価値の高いものになることを知る経験にもなる。その過程で学習者は自らの考えを再考し形成していく。

4 総括：国語教育における学びの構造転換に向けて

国語科の調査結果では、平成 27 年度以降、中学校第 3 学年における R3 以上の割合の増加がみられる。一方、学年進行に伴って R1・2 が増加する傾向にも変化がない。つまり、学び残しを解消し、言葉による見方・考え方を働かせて自ら知を学び取る学び方を全ての児童・生徒に育むため、真の学習者主体を追求する学びの構造転換が必要である。

観点別の考察では、書く能力に依然として大きな課題がみられた。学習者自身が、自分の思いや考えを伝えたいと願い、目的意識、相手意識を明確にもたなければ学びの必然性を伴った学習課題は生まれない。何をどのように伝えたいか、そのためにどのように書き方を工夫したらよいかと書き手が意識し、課題を解決しようと文章の構成を考えたり、推敲したりしていく中でこそ探究に没頭することができる。そして、「自分の書き方は読み手に思いが伝わっているか」「他の書き方を知りたい」という思いをもつからこそ、他者の力を必要とし、自ら対話を求めて、必然的に協同の学びが生じるのである。その中で、自分の書き方が認められ、書き手としての自信につながり、また、より適切な言葉や表現を知り、自分が何を身に付けたらよいか分かり、新たな課題を見付けることができる。

次に、読む能力では、文章の形式、表現に関する考えの形成についての設問に課題がみられた。書き方の工夫や表現の効果について理解する力を育てることが必要である。そのためには、筆者の意図や、行動や情景描写などの表現が文章全体に与える効果について、自分なりの考えをもち、追究する読みが求められる。その考えを出発点に課題を見付け、文章の形式やどのような叙述に着目して読むかを選び、決定する。言葉による見方・考え方を働かせ、作品や他者との対話により、多様な考えに触れ、自己内対話が深まる。

例えば、小学校第 6 学年「やまなし」では、読んだ印象や感想を交流する中で、読み深めたい学習課題を自己決定する活動を設定する。学習材のもつ不思議さや分からなさが未知との出会いとなり、もっと読みたい、分かりたいという思いから探究的に読む学習单元である。読む視点は内容や表現の特徴、優れた表現が考えられ、初めに立てる課題も「題名の理由」「クラムボンとは」など多様である。一人一人が自分の課題解決に合った叙述や表現に着目し、書き抜いたり、図式化したり、それまでの学びを活用しながら自分の考えを形成していく。探究の過程で、例えば「『白いかばの花びら』や『光のあみはゆらゆら』は美しい様子だ」と新たに心に響いた表現に着目し、「なぜ恐ろしく辛い出来事の後には美しい情景を描いているのだろうか」といった疑問をもつことで課題が発展する。それまで着目していた表現と新たなそれとを関連させて考え、「凄惨な出来事があっても美しいものは存在するという現実」に気付く。言語活動についても、自己の課題解決と学習のまとめを表現するために朗読したり、本の帯を作ったりと適切なものを選び取るだろう。教師が忘れてはならないのは、協同もまたその基本を学習者が必要に応じて選び取る学び方の選択肢としながらも、時に異なる解釈や考えをもつ他者に意図的に出会わせ、それをきっかけに学習集団全体としても読みの広さと深さを追究する関わりをすることである。

このように、個別に課題を選び決めることで自ら問いをもち、課題を立てる力と学び方を同時に身に付けることができる。じっくりと探究に浸り、その中で内発する協同が言葉による見方・考え方を広げ深めるとともに、問いをもち続け、学び続ける学習者を育成することが可能になる。国語科における学びの構造転換が目指す姿である。